

一 位置と環境

1. 地理的環境 (第1図)

阿蘇の自然 平原古墳群が所在する阿蘇地方は、九州本島の中央部に位置する阿蘇山を中心とした地域である。熊本県北東部から大分県西部・宮崎県北西部にかかり、中央火口丘群・カルデラ・外輪山・高原地帯からなる自然豊かな地域である。

中央火口丘群はカルデラ内の中央部に位置する。そのなかでも東から順に根子岳・高岳・中岳・烏帽子岳・杵島岳は阿蘇五岳と呼ばれており、中岳は今もなお噴火活動を続けている。カルデラは東西 18 km、南北 25 km の楕円形をなしている。それは中央火口丘群によって二分され、その北側は阿蘇谷、南側は南郷谷と呼ばれ、標高はともに 400 ~ 500 m ほどである。また、阿蘇谷には黒川、南郷谷



第1図 阿蘇地域の地形と平原古墳群の位置

には白川が東から西に向かって流れている。これらはカルデラ西端で合流して白川となり、^{たての}立野火口瀬、熊本平野へと流れ有明海へ注いでいる。

阿蘇地方は九州山地型の気候区に属する（川西 1994）。九州山地型は気温が低く、降水量が多いことを特徴とする。阿蘇地方は、夏は涼しいが冬の寒さは厳しく、降水量は特に梅雨に多い。降水量が多いことは阿蘇地方にさまざまな影響を与えてきた。まず阿蘇地方に豊富な水資源がある要因となった。そして、自然災害をもたらしてきた。2012年夏には、豪雨によって河川氾濫や土砂災害が発生した。河川の増水によって被害は阿蘇地方だけでなく白川下流の熊本平野でも発生し、いまだその爪痕が残っている。

阿蘇山周辺では火山活動の影響から温泉が多く湧いており、地元の人々をはじめ観光客にも親しまれている。特に阿蘇谷北西部の内牧地域は温泉街としてよく知られている。また、外輪山の裾野に広がる高原地帯は阿蘇の風物詩のひとつである赤牛の放牧に利用されている。

平原古墳群 このような阿蘇地方では古墳時代になると多くの古墳が築造された。調査対象とした平原古墳群もその一つである。平原古墳群は阿蘇谷の北側、^{とおみがはな}遠見ヶ鼻（^{だいかんぼう}大観峰）と象ヶ鼻に挟まれた外輪山から岬状に南へのびた尾根上に位置する。平原古墳群は東側の山田地区と西側の^{おくら}小倉地区にまたがっており、標高は500～530 mである。平原古墳群のある尾根の南側には平野が広がっており、黒川が流れている。また、平原古墳群から見て南東の阿蘇谷平地部には中通古墳群が存在する。中通古墳群は熊本県全域においても中心的な古墳群の一つとされ、樹木がなければ平原古墳群と互いを視認しようと推測される。

阿蘇の成り立ち 世界有数のカルデラをもつことで有名な阿蘇山であるが、その成り立ちは複雑である。鮮新世（約520万年前～160万年前）の初期から更新世（約160万年前～1万年前）後半にかけて、数多くの火山が活動していた。それらはカルデラ形成の原因となった「阿蘇外輪火山」であり、現在の外輪山とは異なるものとされている。^{くらだけ}鞍岳・^{おのたけ}尾ノ岳・^{せいせいざん}遠見ヶ鼻（大観峰）・^{たかじょうや}清栄山・高千穂野・^{かんむりがたけ}冠ヶ岳・^{たわらやま}俵山などは火山活動後に残された阿蘇外輪火山の一部である（渡辺 2001）。阿蘇外輪火山は大きく分けると4回に渡って火砕流を伴う火山活動を起こした（約27万年前・14万年前・12万年前・9万年前）。この4回の活動によりカルデラと外輪山が形成され、カルデラ内に雨水がたまりカルデラ湖が生じた。この湖が古阿蘇湖であり、立野火口瀬から水が流出したことで消滅した。存続期間は明らかになっていない。その後一度開いた立野火口瀬が中央火口丘群から流れ出た溶岩でせきとめられ、南郷谷で^{くぎの}久木野湖、阿蘇谷で阿蘇谷湖が生じた。久木野湖は約4万年前に消滅し、阿蘇谷湖は縄文時代早期まで存在していたと推定される。カルデラ湖消滅以後、カルデラ内は湿地から次第に人間の居住に適した環境へと変化した。このことによって人間がカルデラ内に進出し、居住するようになったと考えられている。

地質 阿蘇地方の地質は、最上層が黒ボク土層であり、その下にアカホヤ層、ローム層、そして^{あいらたんだわ}始良丹沢火山灰層という順に積み重なっている。カルデラ及び中央火口丘群周辺の土壌の多くは噴火に伴う火山噴出物からなっており、多くの場所では最上部に火山灰が堆積している。中央火口丘群の岩石は多種多様だが、その大部分は輝石安山岩である。外輪山の上部の岩石は阿蘇外輪火山の噴出物だが、それより下部にある岩石は阿蘇外輪火山より古い火山あるいはその火山の噴出物である。

平原古墳群が所在する山田地区の表層は、大観峰付近のカルデラ壁に露出する輝石角閃石デイサイト火砕岩（安山岩質岩石）であり、約27万年前の大規模な噴火以前の先阿蘇火山岩類である。露出が限られているため、その産状ははっきりしていない。（津田）

2. 歴史的環境

(1) 阿蘇の原始・古代

弥生時代以前 阿蘇地域における生活の痕跡は旧石器時代から認められている。ただし、カルデラ湖の存在が想定されるカルデラ内ではなく、外輪山の山頂付近の平地部に数箇所遺跡が分布する。カルデラの外輪山周辺には湧水と石器石材の露頭が点在することから、そこは石材を採取する人々のキャンプ地であったと考えられる。

縄文時代になるとカルデラ湖は消滅する。そのため当時代の遺跡は標高 470～480 m のカルデラ内から標高 520～740 m の外輪山斜面、丘陵部に点在するようになる。阿蘇地域では縄文時代草創期から晩期までの土器型式が発見されているが、阿蘇地域固有の土器型式はみられない。しかし、九州の中央に位置し、九州各県へ東西南北に流れる河川の水源が存在しているという阿蘇地域の地理的位置のため、各方面からもたらされた遺物が出土している。このように、阿蘇地域は九州各地をつなぐ結節点であった。

弥生時代になると、よりカルデラ内に人間の活動範囲が広がっていく。石包丁や刃などが検出された遺跡があり、カルデラ内では阿蘇谷側で少なくとも弥生中期後半に稲作が開始されていたことがわかっている。弥生時代の遺跡は、カルデラ内の微高地に立地する。すなわち標高 400～500 m の外輪山麓、黒川の自然堤防上や中央火口丘群の微高地に分布し、中期以降、特に後期に入ると遺跡が大幅に増加する。なかでも阿蘇谷の西側に遺跡が集中する。その理由として考えられているのが、ベンガラ（赤色顔料）と鉄である。阿蘇谷西側には、ベンガラの原料となる沈殿褐鉄鉱床が広がっている。さらにこれは鉄の原料となった可能性もあり、今後の重要な検討課題である。（松本）

古墳時代以降 古墳時代になると、阿蘇地域でも次第に大規模な古墳築造が行われるようになった。このことはおよそ 260 基の古墳と 56 の古墳群が確認されていることから容易に想像できる。

前期の古墳の様相は不明確だが、箱式石棺や方形周溝墓の存在が確認されている。これらは弥生時代の流れを引くものである。代表的な例では阿蘇谷の阿蘇市本村石棺、南郷谷の高森町中大村古墳群がある。本村石棺は、出土した二重口縁壺から前期に比定されることは確実である。中期になると、大規模な墳丘を持つ古墳が築造されはじめ、熊本県地域でも中心的な古墳群の 1 つである中なか通とお古墳群が造られる。そこに含まれる長目塚古墳は墳長 111.5 m で周濠を持つ大規模な前方後円墳である。その前方部主体部は竪穴式石室であり仿製内行花文鏡や鉄刀、鉄鏃、玉類など多数の副葬品が出土した。また壺形埴輪と円筒埴輪も多数検出されており、今回調査を行った平原 6 号墳から出土した壺形埴輪との関係性を見るうえでも重要な古墳である。中期後葉から後期になると、横穴式石室が主体部に採用されるようになった。その代表例として、阿蘇市西手野古墳群に築かれた上御倉古墳・下御倉古墳が挙げられる。また阿蘇市迎平古墳群は 8 基以上の円墳で構成され、6 号墳からは環状乳画文帯神獣鏡が出土した。ほかに、馬具や武器が多く出土した阿蘇市塩塚古墳、標高およそ 730 m の高所に立地する城山横穴群などが知られている。

古墳時代の集落は詳しい調査が行われていないため不明な点が多い。阿蘇谷東側の水質と土壌は水田稲作に適しているため、ここに集落が営まれていた可能性が高い。今後の重要な検討課題である。

大化改新の後、肥後国の成立にともない阿蘇郡が設置された。阿蘇郡を統治する郡司は、阿蘇国造であった阿蘇氏が務めた。郡衙は阿蘇市一の宮町役犬原地区にあったと考えられている。阿蘇氏は、拠点を移しつつ大宮司家として平安時代から室町時代にかけて繁栄を極めた。しかし、戦国時代末期における島津氏の侵攻や豊臣秀吉の九州平定の影響を受けて衰退の道をたどった。（幣島）

(2) 九州の壺形埴輪 (第2・3図、第1表)

九州における壺形埴輪の検討、編年案の作成は小口妙子(1985)、片岡宏二(1985)、村上久和(1988)、田中裕介(1995)、竹中克繁(2004)の各氏によってなされている。なかでも竹中克繁氏は九州各地の壺形埴輪出土古墳を選別し、属性分析によって編年案を作成した。2000年には九州前方後円墳研究会において円筒埴輪や形象埴輪も含めて九州出土埴輪が集成された。しかし、壺形埴輪に限定した集成はこれまで行われておらずその様相が十分に把握されているとは言えない。そこで九州における壺形埴輪の出土状況を概観するために集成を行い(第1表)、分布図を作成した(第3図)。その結果を踏まえ九州の壺形埴輪についての概要を述べたい。

なお、壺形埴輪の定義は研究者によって異なるが、ここでは「古墳ないし祭祀遺構に伴う、底部に穿孔が施された壺形の土器」とする。壺形埴輪の底部穿孔技法は「焼成後穿孔」、「焼成前穿孔」、「焼成前成形」の3つに分類した。「焼成後穿孔」は焼成後に穿孔を施すものである。「焼成前穿孔」は底部を一度作り、焼成前に穿孔を施すもの、「焼成前成形」は底部をあらかじめ作らず、開いた状態で成形するものである。

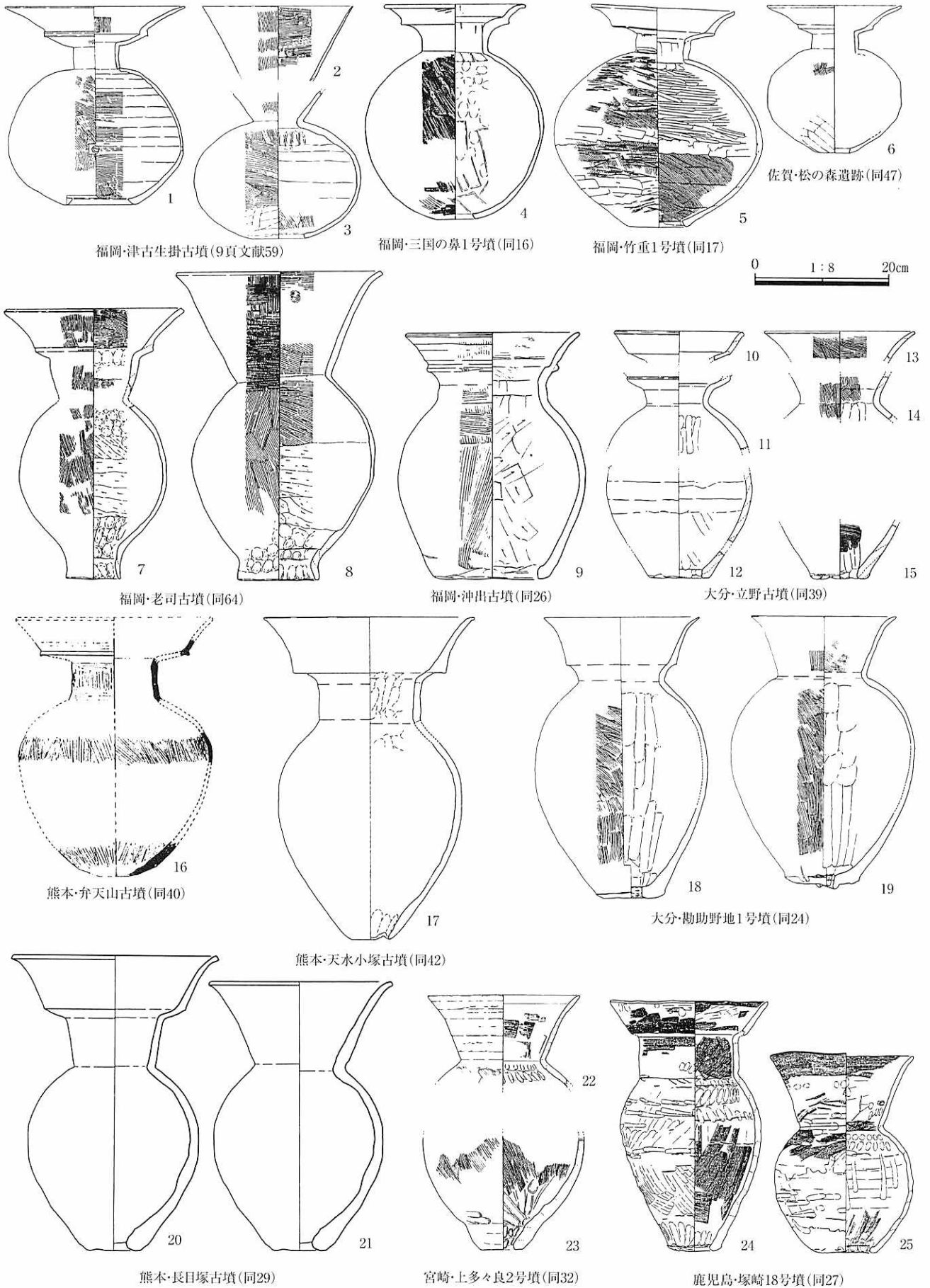
時期と分布 九州における壺形埴輪はおもに前方後円墳集成編年(広瀬1991)(以下、集成編年とする)1～5期頃、つまり古墳時代前期から中期前葉の時期幅で見られる。また、壺形埴輪の出土はほぼ九州全域で見られるが、長崎県地域においては確認されていない。

佐賀県地域 出土は4例と少ないが、福岡県と佐賀県の県境にまたがる脊振山地の周辺に点在して見られる。脊振山の北側には福岡平野、南側には佐賀平野が広がる。佐賀県地域ではいずれにおいても二重口縁壺形埴輪のみが出土している。脊振山の西北側に所在する神埼郡吉野ヶ里町松の森遺跡は集成編年2期に位置づけられ、初現期の壺形埴輪が出土する。当遺跡の壺形埴輪は胴部径が胴部高を上回り扁平ともいえる胴部形状を持つ。器壁が非常に薄く、寸法はあまり大きくない。また底部は焼成前穿孔が施される(第2図6)。

福岡県地域 出土は県西部に集中しており、中でも那珂川流域に多く見られる。那珂川は福岡平野の中央部を北流しており、福岡県筑紫郡那珂川町と佐賀県神埼郡吉野ヶ里町との町界を形成する。那珂川流域においては福岡市卯内尺古墳、同市老司古墳、那珂川町安德大塚古墳、小郡市津古生掛古墳から出土している。なかでも津古生掛古墳は集成編年1期に位置づけられ、佐賀県神埼郡吉野ヶ里町松の森遺跡と同様の器形をもつ初現期の壺形埴輪が出土する(第2図1～3)。さらに、筑後川流域に所在するうきは市吉井町竹重1号墳においても両古墳と同様の器形をもつ壺形埴輪が出土している(第2図5)。当古墳も集成編年1期に位置づけられる。

大分県地域 出土はおもに大分平野と豊後大野市三重地区に見られる。大分平野は大分県中部の別府湾岸に位置しており、平野部の少ない大分県内では屈指の広さを誇る平野である。大分平野においては集成編年3～5期に位置づけられる壺形埴輪出土古墳が集中しており、単口縁の壺形埴輪のみ出土する。豊後大野市三重地区には大野川の支流である三重川が北流する。当地区には大分平野と同様、集成編年3～5期に位置づけられる壺形埴輪出土古墳が集中している。

ところで、周防灘に面する中津市所在の勘助野地1号墳は集成編年5期に位置づけられ、最終段階の壺形埴輪が出土する(第2図18・19)。当古墳の壺形埴輪は長胴で胴部器壁は厚手で寸法が大きい。また、当古墳の壺形埴輪は、いったん底部を厚い平底に成形したのちに改めて鋭利な工具で荒っぽく穿孔を施すという特徴的な技法をとる。この技法は平底後穿孔(田中1995)とされるもので、同様の技法は三重町重政古墳においても見られる。



第2図 九州出土壺形埴輪の諸例

熊本県地域 出土はおもに宇土半島基部、菊池川流域、阿蘇地域に集中している。宇土半島は熊本県中部の半島であり北側は有明海、南側は八代海に面している。宇土半島基部に所在する宇城市不知火町弁天山古墳は集成編年2～3期に位置づけられる。当古墳の壺形埴輪は器壁が薄く、底部は焼成前穿孔である(第2図16)。胴部は初現期のものに比べて球形である。福岡県小郡市三国の鼻1号墳の壺形埴輪も同様の胴部をもつ(第2図4)。阿蘇地域の阿蘇市長目塚古墳からは単口縁と二重口縁の壺形埴輪、円筒埴輪が出土している。時期は集成編年6～7期で、最終段階の壺形埴輪である(第2図20・21)。

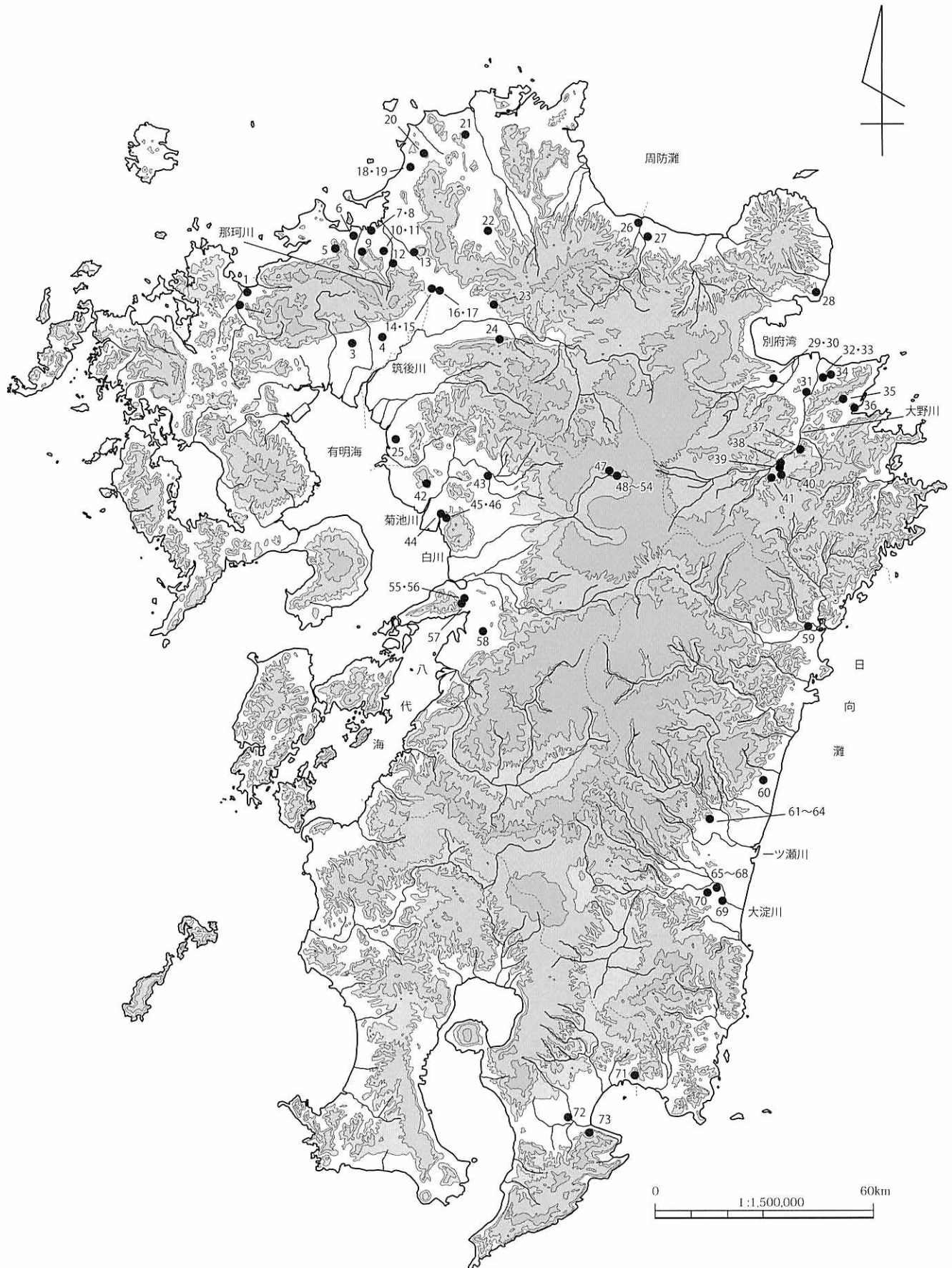
宮崎県地域 出土はおもに一ツ瀬川流域の西都原古墳群と大淀川流域の生目古墳群に集中する。一ツ瀬川は宮崎県中部を南東に流れ、日向灘に注ぐ。一ツ瀬川流域の西都市西都原古墳群では13号墳、46号墳、100号墳、169号墳において壺形埴輪が出土している。大淀川は宮崎県南部の都城盆地や宮崎平野を流れ、日向灘に注ぐ。大淀川流域の宮崎市生目古墳群では、5号墳、14号墳、21号墳、22号墳において壺形埴輪が出土している。集成編年4～5期に位置づけられる5号墳、14号墳出土の壺形埴輪は円筒埴輪を意識した直立する底部を持つ。なお、県北部に所在する延岡市上多々良2号墳は集成編年4～5期に位置づけられる。当古墳の壺形埴輪は、日向街道で北に結ばれた大分県豊後大野市三重地区の壺形埴輪と器形が類似する(第2図22・23)。

鹿児島県地域 出土は肝属平野周辺域においての3例のみである。肝属平野は大隅半島中部に所在し、前方後円墳が分布する南限の地域である。肝属郡肝付町塚崎18号墳は集成編年5期に位置づけられる。当古墳出土の壺形埴輪は胴部が長胴形のものと同球形のもの二つが存在する。底部は焼成前成形であると思われる(第2図24・25)。

九州の壺形埴輪 上述したように、九州において壺形埴輪はおもに集成編年1～5期頃、つまり古墳時代前期から中期前葉に見られる。また、大きく見ると佐賀県地域、福岡県地域においては集成編年1～4期頃、大分県地域、熊本県地域においては2～5期頃、宮崎県地域、鹿児島県地域においては3～5期頃に壺形埴輪は出土している。このことから九州においては、壺形埴輪は北部九州において古墳時代前期初頭に出現し、中期前葉にかけて九州全域に広がりを見せるという様相がうかがえる。

円筒埴輪との共伴に注目してみると佐賀県地域、福岡県地域、大分県地域においては集成編年3期以降にそれが見られる。一方、熊本県地域、宮崎県地域においては集成編年5期以降に見られ、鹿児島県地域では見られない。以上のことから壺形埴輪と円筒埴輪を同時採用する時期は県地域ごとに異なるといえる。また、円筒埴輪の出現と壺形埴輪の底部穿孔技法との間には影響関係が見られない。焼成前成形は初めから底を塞がずに胴部を成形する方法であるから、「埴輪」としての性格が強められた結果の製作法であり、その採用は重要な画期であるといえる。しかし、佐賀県佐賀市銚子塚古墳や大分県杵築市小熊山古墳の壺形埴輪は円筒埴輪が共伴するにもかかわらず底部には焼成前穿孔が施され、円筒埴輪の出現が底部穿孔技法に影響を与えなかったといえる。一方で宮崎県宮崎市生目14号墳の壺形埴輪には円筒埴輪を意識した底部穿孔技法が施されるが、円筒埴輪は採用されていない。このように、「円筒埴輪の出現」と「円筒埴輪に影響を受けた底部穿孔技法の出現」の前後関係もまた県地域ごとに異なるといえる。

以上のように、九州の壺形埴輪は古墳時代前期初頭に北部九州で出現し、前期を通して円筒埴輪からの影響を受けながら墳丘を表飾する「埴輪」としての性格を強めていった。その様相には地域差があり、一様に変遷を追うことはできない。しかし、中期中葉には九州全域で壺形埴輪は用いられなくなり、円筒埴輪に取って代わられるといえる。(中村)



第3図 九州における壺形埴輪出土古墳の分布（番号は第1表に対応）

一 位置と環境

第1表 九州における壺形埴輪出土古墳一覧表

No.	古墳名	所在地	墳形	時期	壺		円	朝	形象	底部穿孔技法	備考	参考文献
					単口縁	二重口縁						
1	中原遺跡	佐賀県唐津市原	—	1期						焼成後穿孔?		19
2	久里双水古墳	佐賀県唐津市久里	前方後円	2期		○				焼成前穿孔		31, 36, 37, 43
3	鎌子塚古墳	佐賀県佐賀市金立	前方後円	3期		○	○			焼成前穿孔		18, 31
4	松の森遺跡	佐賀県神埼郡吉野ヶ里	—	2期		○				焼成前穿孔		31, 47
5	築山古墳	福岡県糸島市三雲	前方後円	4期		○	○					31, 62
6	鉾崎古墳	福岡県福岡市西区今宿	前方後円	4期		○	○	○	○	焼成前成形		30, 31
7	藤崎1号方形周溝墓	福岡県福岡市早良区百道	—	1期		○						51
8	藤崎7号方形周溝墓	福岡県福岡市早良区百道	—	1期		○				焼成前穿孔		51
9	拝塚古墳	福岡県福岡市早良区重留	前方後円	5～6期		△		○	○			2, 31
10	卯内尺古墳	福岡県福岡市南区老司	前方後円	2～3期	◎	○			○	焼成前穿孔		10, 31, 65
11	老司古墳	福岡県福岡市南区老司	前方後円	4期	○	○	○		○	焼成前成形		31, 64, 65
12	安徳大塚古墳	福岡県筑紫郡那珂川町安徳	前方後円	4期		△		○				10, 31
13	笹原古墳	福岡県大野城市大城	円	5期	○	○				焼成前成形?		31, 57
14	三国の鼻1号墳	福岡県小郡市津古	前方後円	3期		○				焼成前穿孔		31, 16
15	津古生掛古墳	福岡県小郡市津古	前方後円	1期	○	◎				焼成後・前穿孔		31, 59
16	松尾1号墳	福岡県朝倉郡筑前町四三嶋	方		○	○				焼成後穿孔		63
17	焼ノ峠古墳	福岡県朝倉郡筑前町四三嶋	前方後方	2期	○	○				焼成後穿孔		56
18	千鳥14号墳	福岡県古賀市千鳥	円	4～5期		○	○	○		焼成後穿孔		31, 52
19	千鳥15号墳	福岡県古賀市千鳥	方	4～5期		○				焼成後穿孔		52
20	東郷高塚古墳	福岡県宗像市日の里	前方後円	4期	◎	○				焼成前穿孔		31, 53
21	豊前坊1号墳	福岡県遠賀郡遠賀町上別府	前方後円	4期	○	○	?			焼成前穿孔・成形		31, 34
22	神出古墳	福岡県嘉麻市漆生	前方後円	4期	○	○	○	○		焼成前穿孔・成形		26, 31
23	下町外畑1号墳	福岡県朝倉市宮野	前方後円	2期		○					特徴的な基部	54
24	竹重1号墳	福岡県うきは市吉井町富永	前方後方	1期		○				焼成前穿孔		17
25	黒崎観世音塚古墳	福岡県大牟田市碑	前方後円	4期	○	◎	○			焼成前成形		21, 31
26	天神寺古墳	福岡県築上郡吉富	円	10期		○	○				混入か?	20, 31
27	勘助野地1号墳	大分県中津市相原	方	5期	○	○				平底後成形		24, 31, 38, 39
28	小熊山古墳	大分県杵築市狩宿	前方後円	2期	◎	○	○			焼成前穿孔		31, 38, 39, 55
29	蓬菜山古墳	大分県大分市荏隈	前方後円	3期	?	○				焼成前穿孔		31, 38, 39
30	庄ノ原遺跡	大分県大分市荏隈	—	5～6期		○						31, 33, 39
31	小牧山6号墳	大分県大分市松岡	前方後円	4期		○				焼成前成形		31, 38, 39
32	野間1号墳	大分県大分市丹生	前方後円	4期		○				焼成前穿孔		15, 31, 38, 39
33	野間2号墳	大分県大分市丹生	前方後円	4期		?		○				15, 31, 39
34	亀塚古墳	大分県大分市丹生	前方後円	4期	?	○	○	○	○	焼成前穿孔・成形		23, 31, 38, 39
35	白塚古墳	大分県白杵市稲田	前方後円	5期		○	○			焼成前成形		31, 38, 39
36	下山古墳	大分県白杵市諏訪	前方後円	5期		○	○			焼成前成形		31, 38, 39
37	宮尾塚ノ原遺跡	大分県豊後大野市三重町宮野	—	4期		○				焼成前成形		31
38	立野古墳	大分県豊後大野市三重町上田原	前方後円	4期	○	◎	○			焼成前成形		31, 38, 39
39	道の上古墳	大分県豊後大野市三重町赤嶺	前方後円	5期		?						31, 39
40	重政古墳	大分県豊後大野市三重町内田	前方後円	4期		△				平底後成形		31, 38, 39
41	秋葉塚古墳	大分県豊後大野市三重町秋葉	前方後円	4～5期	○					焼成前成形?		39
42	院塚古墳	熊本県玉名市岱明町開田	前方後円	4期	○	○				焼成前成形		13, 28, 31, 42
43	慈恩寺経塚古墳	熊本県熊本市北区植木町米塚	円	7期	○	○	○	○		焼成前成形		28, 31, 45, 46
44	天水立花大塚古墳	熊本県玉名市天水町立花	前方後円	3～4期	○	○				焼成後穿孔		28, 31, 42
45	天水小塚古墳	熊本県玉名市天水町田見	円	5期	○	○	○			焼成前穿孔・成形		28, 31, 42
46	天水経塚古墳	熊本県玉名市天水町田見	円	4期		○						28, 31, 42
47	平原6号墳	熊本県阿蘇市山田	円	4期	○	○				焼成前成形		61
48	長目塚古墳	熊本県阿蘇市中通	前方後円	6～7期	○	○	○	○		焼成前成形		11, 28, 29, 42, 60
49	上鞍掛塚A古墳	熊本県阿蘇市中通	前方後円			△		?	?			31
50	上鞍掛塚B古墳	熊本県阿蘇市中通	円			△		?	?			31
51	鞍掛塚A古墳	熊本県阿蘇市中通	円			△		?	?			31
52	鞍掛塚B古墳	熊本県阿蘇市中通	円			?		?	?			31
53	車塚A古墳	熊本県阿蘇市中通	円			△		?	?			31
54	勝負塚古墳	熊本県阿蘇市中通	円			?						31
55	スリバチ山古墳	熊本県宇土市神合	前方後円	3～4期	○							41, 42
56	道ノ上古墳	熊本県宇土市神合	前方後円	2～3期		△						41
57	弁天山古墳	熊本県宇城市不知火町長崎	前方後円	2～3期		○				焼成前穿孔		22, 28, 31, 40, 42
58	高塚東原遺跡	熊本県八代郡米川町高塚	—			○				焼成後穿孔		42, 50
59	上多々良2号墳	宮崎県延岡市岡富町	円	4～5期	○					焼成前穿孔		32
60	川南33号墳	宮崎県児湯郡川南町川南	前方後円	5期		△		○				25, 31
61	西都原13号墳	宮崎県西都市三宅	前方後円	3期	○	○				焼成前穿孔		3, 31
62	西都原46号墳	宮崎県西都市三宅	前方後円			○				焼成後穿孔		48
63	西都原100号墳	宮崎県西都市三宅	前方後円	4期	○	○				焼成前穿孔		31, 58
64	西都原169号墳	宮崎県西都市三宅	円	5期			○	○	○		鏝付壺形埴輪出土	1, 9
65	生目5号墳	宮崎県宮崎市跡江	前方後円	5期				○		焼成前成形	壺に近い異形埴輪	4, 8, 31
66	生目14号墳	宮崎県宮崎市跡江	前方後円	4期	○	◎				焼成前成形		5, 7
67	生目21号墳	宮崎県宮崎市跡江	円	2～3期		○				焼成後穿孔		35
68	生目22号墳	宮崎県宮崎市跡江	前方後円	3期		○				焼成前穿孔	二重口縁か?	6, 31
69	大淀3号墳	宮崎県宮崎市大塚	前方後円	5期		○				焼成後・前穿孔		31, 44
70	追内2号墳	宮崎県宮崎市富吉	円	3～5期		○				焼成後穿孔		14
71	飯盛山古墳	鹿児島県志布志市志布志町夏井	前方後円	5期	○					焼成前成形?		12, 31
72	岡崎20号墳	鹿児島県鹿屋市串良町岡崎	前方後円	4期		○				焼成後穿孔		49
73	塚崎18号墳	鹿児島県肝属郡肝付町野崎	円	5期	○	○				焼成前穿孔		27

○: 存在を確認できる ◎: 主体だと思われる △: 口縁部形態不明 ? : 詳細不明

※秋葉塚古墳 (No. 41) の壺形埴輪については発掘調査見学会にてご教授頂いた。

第 1 表関連文献

1. 飯田博之・松林豊樹編 1999『発掘調査・保存整備概要報告書』(IV) 宮崎県教育委員会
2. 井沢洋一ほか編 1990『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 235 集 福岡市教育委員会
3. 石川悦雄ほか編 1998『発掘調査・保存整備概要報告書』(iii) 宮崎県教育委員会
4. 福岡洋道編 2003『宮崎市文化財調査報告書』第 54 集 宮崎市教育委員会
5. 福岡洋道編 2004『宮崎市文化財調査報告書』第 57 集 宮崎市教育委員会
6. 福岡洋道編 2006『宮崎市文化財調査報告書』第 61 集 宮崎市教育委員会
7. 福岡洋道編 2007『宮崎市文化財調査報告書』第 65 集 宮崎市教育委員会
8. 福岡洋道編 2010『宮崎市文化財調査報告書』第 80 集 宮崎市教育委員会
9. 大木 努編 2010『西都原古墳群発掘調査報告書』第 9 集 宮崎県教育委員会
10. 井上義也ほか編 2000『春日市文化財調査報告書』第 27 集 春日市教育委員会
11. 岩崎充宏・山下志保編 1994「中通古墳群」『熊本大学文学部考古学研究室』第 1 集 熊本大学考古学研究室
12. 上村俊雄 1970「飯盛山古墳とその周辺」『九州考古学』39・40 九州考古学会
13. 乙益重隆ほか編 1965「院塚古墳調査報告」『熊本県文化財調査報告』第 6 集 熊本県教育委員会
14. 小山 博編 2002『東九州自動車道建設に伴う発掘調査報告書』第 59 集 宮崎県埋蔵文化財センター
15. 賀川光夫 1967『大分県文化財調査報告書』第 13 輯 大分県教育委員会
16. 片岡宏二編 1985『小郡市文化財調査報告書』第 25 集 小郡市教育委員会
17. 岸本 圭編 2008『福岡県埋蔵文化財調査報告書』第 217 集 福岡県教育委員会
18. 木下之浩編 1976『銚子塚古墳』佐賀市教育委員会
19. 小松 譲ほか編 2012『佐賀県文化財調査報告書』第 193 集 佐賀県教育委員会
20. 坂井仁夫編 1983『吉富町文化財調査報告書』吉富町教育委員会
21. 坂井義哉編 1999『大牟田市文化財調査報告書』第 52 集 大牟田市教育委員会
22. 坂本経亮 1972「不知火町現存古墳」『不知火町史』宇土郡不知火町
23. 讃岐和夫編 1994『亀塚古墳』大分市教育委員会
24. 渋谷忠章編 1988『一般国道 10 号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 大分県教育委員会
25. 島岡 武 1993「川南古墳群」『宮崎県史』資料編考古 2 宮崎県
26. 新原正典編 1989『稲築町文化財調査報告書』第 2 集 稲築町教育委員会
27. 新福 深編 2009『肝付町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11) 鹿児島県肝付町教育委員会
28. 杉井 健 2003「第二節 三 熊本県地域における前期古墳の様相」『新宇土市史』通史編第 1 巻自然・原始古代 宇土市
29. 杉井 健編 2014『長目塚古墳の研究』熊本大学文学部
30. 杉山富雄編 2002『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 730 集 福岡市教育委員会
31. 第 3 回九州前後円墳研究会実行委員会編 2000『九州の埴輪その変遷と地域性』第 3 回九州前後円墳研究会発表要旨・資料編 九州前後円墳研究会
32. 高浦 哲編 2011『延岡市文化財調査報告書』第 45 集 延岡市教育委員会
33. 高橋 徹ほか編 1996『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』5 号 大分県教育委員会
34. 武田光正編 1996『遠賀町文化財調査報告書』第 8 集 遠賀町教育委員会
35. 竹中克繁編 2011『宮崎市文化財調査報告書』第 85 集 宮崎市教育委員会
36. 田島龍太編 1993『唐津市文化財調査報告書』第 53 集 唐津市教育委員会
37. 田島龍太編 2009『唐津市文化財調査報告書』第 95 集 唐津市教育委員会
38. 田中裕介 1995「東九州における古墳時代首長墓系譜の変遷と画期(上)―埴輪と墳丘形態からみた大分の首長墓の編年―」『おおいた考古』第 7 集 大分県考古学会
39. 田中裕介ほか編 1998『大分県文化財調査報告書』第 100 輯 大分県教育委員
40. 富樫卯三郎 1966「弁天山古墳調査概報」『熊本史学』第 30 号 熊本史学会
41. 富樫卯三郎 1977『宇土市の文化財』第 3 集 宇土市教育委員会
42. 中川裕二編 1998『天水町文化財調査報告書』第 1 集 天水町教育委員会
43. 中島直幸 1982「VI 古墳時代 2 主要古墳 [1] 久里双水前方後円墳」『末盧国』六興出版
44. 長津宗重編 1988『宮崎県文化財調査報告書』第 31 集 宮崎県教育委員会
45. 中原幹彦編 1995『植木町文化財調査報告書』第 4 集 植木町教育委員会
46. 中原幹彦編 1996『植木町文化財調査報告書』第 5 集 植木町教育委員会
47. 西田和己編 1983『佐賀県文化財調査報告書』第 70 集 佐賀県教育委員会
48. 二宮満夫編 2008『特別史跡 西都原古墳群発掘調査報告書』第 8 集 宮崎県教育委員会
49. 橋本達也ほか編 2008『鹿児島大学総合研究博物館研究報告』No. 3 鹿児島大学総合研究博物館
50. 花岡興輝 1957「八代郡龍北村における土師器埋没遺跡について」『熊本史学』第 11 号 熊本史学会
51. 浜石哲也編 1982『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 80 集 福岡市教育委員会
52. 浜田信也編 1985『古賀町文化財調査報告書』第 5 集 古賀町教育委員会
53. 原 俊一編 1989『宗像市文化財調査報告書』第 21 集 宗像市教育委員会
54. 姫野健太郎ほか編 2004『福岡県埋蔵文化財調査報告書』第 192 集 福岡県教育委員会
55. 平川一哉ほか編 2006『杵築市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 10 集 杵築市教育委員会
56. 平嶋文博編 2009『筑前町文化財調査報告書』第 10 集 筑前町教育委員会
57. 舟山良一編 1985『大野城市文化財調査報告書』第 15 集 大野城市教育委員会
58. 松林豊樹編 2002『西都原古墳群発掘調査報告書』第 3 集 宮崎県教育委員会
59. 宮田浩之編 1988『小郡市文化財調査報告書』第 44 集 小郡市教育委員会
60. 森山栄一 1983「長目塚古墳の埴輪」『肥後考古』第 4 号 肥後考古学会
61. 安田未来編 2013「平原古墳群調査報告 1」『考古学研究室報告』第 48 集 熊本大学文学部考古学研究室
62. 柳田康雄・小池史哲編 1982『福岡県文化財調査報告書』第 63 集 福岡県教育委員会
63. 柳田康雄編 2001『夜須町文化財調査報告書』第 54 集 夜須町教育委員会
64. 山口譲治ほか編 1989『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 209 集 福岡市教育委員会
65. 吉留秀敏編 2001『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 690 集 福岡市教育委員会

二 調査経過

1. 過去の調査（第1～3次調査）

平原古墳群は1981年に発見され、1982、1983年には測量調査が実施された。この一連の調査を第1次調査と呼称する。1981年の発見は県道213号線の改修工事がきっかけであり、このとき熊本県教育委員会により1号墳が発掘調査された。その結果、1号墳は箱式石棺を主体部とする円墳であると推測され、石棺からは剣1点と堅櫛1点、2体分の歯が検出された。1号墳は破壊されたため、残存していない。また付近にはさらに円墳3基と石棺1基が存在することも指摘された。この当時、古墳群は「小倉古墳群」と呼称されていた。1982、1983年の測量調査は、2～4号墳を対象として熊本短期大学（現熊本学園大学）文化財研究会によって行われた。この時、古墳群に分布する古墳総数は7基であると報告された。ただしこの時と現在とでは古墳号数の認識に混乱が生じており、1983年に測量された4号墳は現在の6号墳に相当する。

その後、平原古墳群に対する調査は行われていなかったが、1989年には古墳群近くの林道工事中に箱式石棺が発見され、「小倉林道石棺」と呼称された。また2010年には現6号墳の南側で火葬墓が検出され、阿蘇市教育委員会により発掘調査が行われた。この時に、火葬墓北側の円墳を6号墳、そのすぐ西側の円墳を7号墳とする認識が示され、それらの測量図も作成された。

2011、2012年には、阿蘇谷に存在する古墳の動向を明らかにすることを目的とし、熊本大学文学部考古学研究室が6・7号墳の測量調査を行った。調査期間は2011年10月14・16・23日、11月1～7日、2012年4月29・30日の計12日間で、この調査を第2次調査と呼称した。

第2次調査の結果を踏まえて6号墳の墳丘規模および構造の解明を目的として、第3次調査を実施した。調査主体は同研究室で、調査期間は2012年8月19日～9月15日の計28日間である。調査区は6号墳の東・北・西の計3箇所^{おくら}に設け、名称はそれぞれ東1・北1・西1トレンチとした。

東1・北1トレンチでは、墳端平坦面の範囲が確認できたが、西1トレンチでは一部を検出したのみで範囲を確認するまでには至らなかった。東1・北1トレンチでは地山をアカホヤ層に達するまで整地することによって墳端平坦面が形成されていた。盛土はアカホヤやその下層のローム土、アカホヤ層上部に存在する黒ボク土が混じった土層で構成されていた。西1トレンチでは、墳端はアカホヤ層下位のローム層に達するまで整地が行われることによって成形されていることを確認した。また全トレンチで周溝となるような掘り込みが存在しないことも判明した。東1・北1トレンチでは段築1段目に葺石が良好に残存していたが、段築2段目までは調査が及ばなかった。西1トレンチでは段築1段目と2段目の葺石を検出し、さらに段築1段目と2段目の間に小礫が敷かれたテラス面が存在することも確認した。このことから6号墳の墳丘は2段築成であると推測できた。また、各トレンチで検出された1段目葺石の基底石の位置から、6号墳は東西の直径が約31mの円墳であると推定した。

遺物は壺形埴輪と土師器が出土したが、全て原位置を留めていなかった。それぞれの特徴から壺形埴輪は集成編年の4期に、土師器は6期前後に位置づけた。このように、両者の編年的位置づけには相違がみられ、今後の検討課題として残された。

第3次調査の結果、6号墳南側の墳端位置、段築2段目およびテラス面の構造、墳頂平坦面の構造や範囲、壺形埴輪の樹立状況の確認が今後の課題として残された。古墳群全体の古墳分布の詳細な調査や測量図の作成、各古墳にどのような番号を与えるのかという検討課題も残された。（豊永）

2. 今回の調査（第4次調査）

第2・3次調査の成果を受け第4次調査は、6号墳の墳端位置の確認、墳頂平坦面・段築構造の解明を目的とし、2013年8月18日～9月14日の計28日間で行った。調査区は北・西・南の3箇所に設け、名称はそれぞれ北1・西1・南1トレンチとした。北1・西1トレンチは墳頂平坦面・段築構造を解明するため、昨年度のトレンチを墳頂方向に延長したものである。南1トレンチは墳丘南側の墳端位置を確認するため、今年度新たに設けたトレンチである。

北1・西1トレンチでは墳頂平坦面の存在を確認した。これらの標高に差はない。今回の調査では墳頂平坦面全体の範囲を確認できていないため、今後南・東側においても確認が必要である。さらに北1トレンチでは段築2段目の葺石を検出し、2段目基底石の位置を確定した。また段築1段目と2段目の間の段築テラス面には小礫が敷かれていることも確認した。さらに北1トレンチの段築テラス面の標高は西1トレンチのものより0.5m程度低いこともわかった。南1トレンチでは、段築1段目の葺石を確認し、墳端位置を確認した。また、墳端平坦面はアカホヤ層の上に盛土を用いて造りだしていることが明らかとなった。墳端平坦面を盛土で形成しているのは南1トレンチだけである。

以上の結果、6号墳は東西31m、南北30mの円墳であると推定された。また、遺物は壺形埴輪と土師器が出土したが、原位置に留まるものはなかった。

なお、調査前半の8月中は天候に恵まれず、作業を思うように進めることができなかった。また、8月31日に予定していた現地説明会も台風の接近にともない中止せざるをえなかった。それでも調査期間中には多くの方々が現場へ足を運んでくださり、我々の調査への関心の高さを再認識することができた。現地説明会の開催など、次年度に期したい。（宮崎）

第2表 平原古墳群基準点の現場座標

基準点名	X座標(m)	Y座標(m)	標高(m)	備考
H 1	0	0	529.532	6号墳墳頂
H 2	4.905	0	529.605	6号墳墳頂
H 3	28.342	0	527.395	7号墳墳頂
H 4	-16.739	0	523.664	
H 5	3.852	-7.374	527.635	
H 6	-1.618	-10.344	526.638	
H 7	-9.068	-5.066	526.103	
H 8	-5.944	5.548	526.691	
H 9	1.667	9.088	527.072	
H 10	9.955	6.007	527.533	
H 11	15.509	11.711	524.948	
H 12	36.550	-0.238	526.542	
H 13	25.017	-10.792	525.472	
H 14	15.036	-13.514	524.848	
H 15	-13.344	-10.655	523.812	
H 16	-8.294	-15.279	523.991	
H 17	-5.797	14.059	524.312	釘修正・標高値変更
H 18	-1.946	-17.397	524.036	
H 19	4.395	-17.816	523.974	釘修正・標高値変更
H 20	-12.652	7.721	523.953	釘修正・標高値変更
H 21	0.800	14.968	524.618	
H 22	16.000	0.762	526.516	
E 1	-16.881	0.515	523.631	東1Tr. 下方
E 2	-10.376	0.521	525.617	東1Tr. 上方
E 3	-1.877	0.542	529.211	東1Tr. 墳頂付近
N 1	0.091	16.346	524.365	北1Tr. 下方
N 2	0.703	10.370	526.414	消失
N 3	1.430	3.415	529.453	北1Tr. 墳頂付近
W 1	19.849	1.358	526.055	西1Tr. 下方
W 2	12.847	1.149	527.817	消失
W 3	5.845	0.914	529.629	西1Tr. 墳頂付近
S 1	5.867	-19.844	523.327	南1Tr. 下方
S 2	4.109	-11.018	526.453	南1Tr. 上方

第3表 平原古墳群基準点の国土座標（世界測地系）

基準点名	X座標(m)	Y座標(m)	標高(m)	備考
H 1	-1902.473	7860.136	529.532	6号墳墳頂
H 2	-1900.652	7855.582	529.605	6号墳墳頂
H 3	-1891.951	7833.822	527.395	7号墳墳頂
H 4	-1908.687	7875.677	523.664	
H 5	-1907.889	7853.822	527.635	
H 6	-1912.678	7857.798	526.638	
H 7	-1910.543	7866.674	526.103	
H 8	-1899.529	7867.714	526.691	
H 9	-1893.416	7861.962	527.072	
H 10	-1893.200	7853.123	527.533	
H 11	-1885.842	7850.084	524.948	
H 12	-1889.125	7826.113	526.542	
H 13	-1903.205	7832.903	525.472	
H 14	-1909.438	7841.159	524.848	
H 15	-1917.320	7868.570	523.812	
H 16	-1919.738	7862.164	523.991	
H 17	-1891.572	7870.738	524.312	釘修正・標高値変更
H 18	-1919.348	7855.484	524.036	
H 19	-1917.383	7849.441	523.974	釘修正・標高値変更
H 20	-1900.002	7874.749	523.953	釘修正・標高値変更
H 21	-1888.279	7864.950	524.618	
H 22	-1895.826	7845.564	526.516	
E 1	-1908.262	7876.000	523.631	東1Tr. 下方
E 2	-1905.841	7869.963	525.617	東1Tr. 上方
E 3	-1902.667	7862.080	529.211	東1Tr. 墳頂付近
N 1	-1887.263	7866.120	524.365	北1Tr. 下方
N 2	-1892.584	7863.333	526.414	消失
N 3	-1898.771	7860.076	529.453	北1Tr. 墳頂付近
W 1	-1893.843	7842.211	526.055	西1Tr. 下方
W 2	-1896.637	7848.635	527.817	消失
W 3	-1899.454	7855.049	529.629	西1Tr. 墳頂付近
S 1	-1918.719	7847.322	523.327	南1Tr. 下方
S 2	-1911.177	7852.231	526.453	南1Tr. 上方

三 6号墳の墳丘構造

1. 墳丘の現状 (第4図)

平原古墳群6号墳(以下、平原6号墳とする)は熊本県阿蘇市山田字平原490番地に所在する円墳である。阿蘇谷の北側、遠見ヶ鼻と象ヶ鼻の間から南に突出する尾根上に位置しており、現在は植林された杉に覆われているが、樹木がなければ中通古墳群とは互いに視認できる距離にある。

現在の平原6号墳の周辺は、北側斜面が急な傾斜であるのに対して南側斜面は比較的緩やかな傾斜となっている。また、墳丘の南側には幅1~2mほどの道が通っている。

平原6号墳墳頂最高点の標高は529.722mであり、墳丘斜面はほぼ一定の傾斜をなしている。墳丘斜面は西側で標高526.3m、北側で524.9m、東側で523.9m、南側で524.6mの付近でほぼ水平に変化する。したがってそれらの地点を墳端と考えるならば、平原6号墳は現在の地形において東西31.3m、南北30.0m、高さ3.4~5.8mの円墳に復元できる。後述のように今回の調査の結果から復元される実際の平原6号墳の規模は地表観察で得られた上記の数値とほぼ同じとなる。また、墳丘の周囲は北側で524.2m、東側で523.4m、南側で523.8mの地点で傾斜が変化しており、いずれの地点でも3m程度の墳端平坦面が復元できる。ただし、西側に関しては墳端平坦面の様子ははっきりとしない。なお、周溝の存在は確認できない。

墳頂平坦面は標高529.3m以上においてみられ、その広さはおよそ東西9.3m、南北7.0mである。墳頂平坦面の東側には盗掘の痕跡と思われる浅い陥没がある。

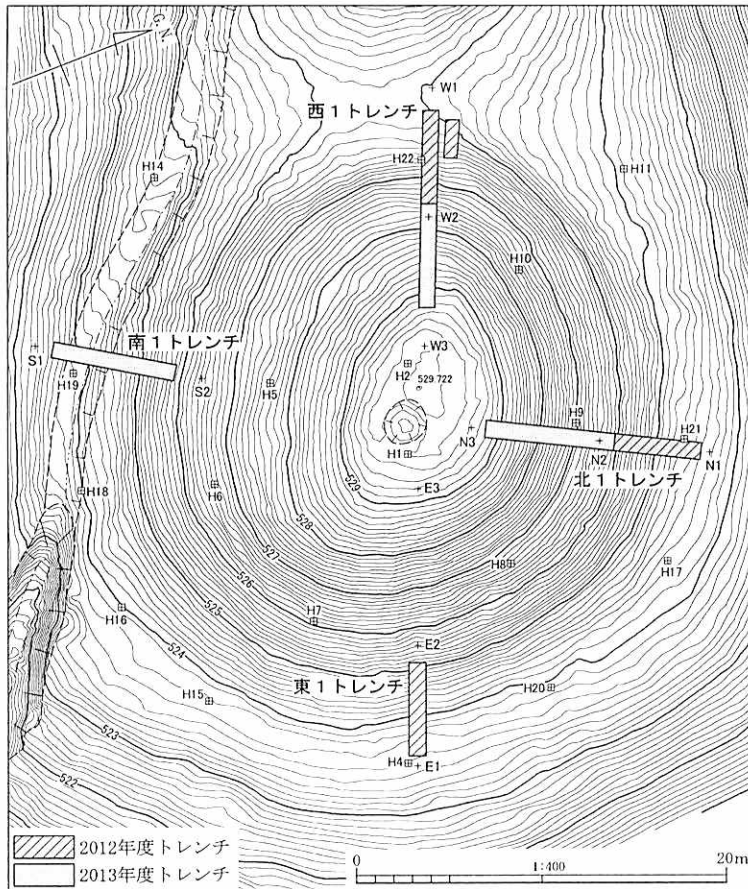
平原6号墳の西側には隣接して平原7号墳が築かれている。平原7号墳最高点の標高は527.379mで、墳丘の傾斜は西側で標高526.7m、北側で526.3m、東側で526.3m、南側で526.4mの地点でほぼ水平に変化する。よってそれぞれを墳端と考えると、平原7号墳は東西11m、南北12m、高さ1mの円墳と推定される。また、墳丘の周囲は北側で標高525.7mの地点において傾斜が変化するため、幅1~2m程度の墳端平坦面が存在すると思われる。西側は尾根に沿って水平な面が続くため墳端平坦面の幅は確認できず、東側、南側の様子も判然としない。標高527.2m以上を墳頂平坦面とするならば、平坦面の直径はおよそ5mである。なお、平原6号墳と7号墳との境ははっきりとしておらず、両者の間隔がどの程度であるかは明らかでない。(秦)

2. トレンチの設定 (第5図)

今回の第4次調査は第3次調査に引き続き平原6号墳の墳丘規模・構造の解明を目的としている。そこで、今年度の調査では平原6号墳墳丘の北・西・南にそれぞれ1箇所ずつ、計3箇所のトレンチを設定した。これら各トレンチは順に北1・西1・南1トレンチと呼称する。昨年度にも調査を行った北1・西1トレンチでは、段築構造及び墳頂平坦面を確認するために昨年度の調査区を墳頂に届くように延長した。トレンチの規模は北1トレンチで幅1m、長さ約13m、西1トレンチで幅1m、長さ約11mに設定した。また、今年度から調査を行う南1トレンチでは、他のトレンチと合わせて平原6号墳の墳端位置および墳端平坦面の様相を検討するために、当初幅1m、長さ5mの規模でトレンチを設定した。しかし、墳端平坦面全体の検出のため、調査途中でトレンチを南側へ約1.5m拡張した。なお、各トレンチは樹木の間を縫うようにして設定したため、互いに直角あるいは平行の関係にはなっていない。(秦)



第4図 平原6・7号墳測量図（東側の円丘が6号墳）



第5図 トレンチ配置図

3. 調査の所見

(1) 北1トレンチ (第6図)

墳丘北側の段築テラス面および墳頂の構造の解明のために設定したトレンチである。このトレンチは昨年度のトレンチを墳頂側に拡張したもので、大きさは幅1m、長さ13mである。トレンチ上端は基準点N3より北に0.7mの位置にある。

以下、昨年度と今年度の調査成果を合わせて報告する。

段築1段目基底石は基準点N1より南に3.2～3.3mの位置にあり、その下端面の標高は524.5mである。確認された段築1段目基底石のうち、最大のは長さ約40cmである。1段目基底石の北では、地山成形により墳端平坦面が造られている。基準点N1より南に1.2m、標高524.0mの地点で傾斜が変化しているため、そこまでが

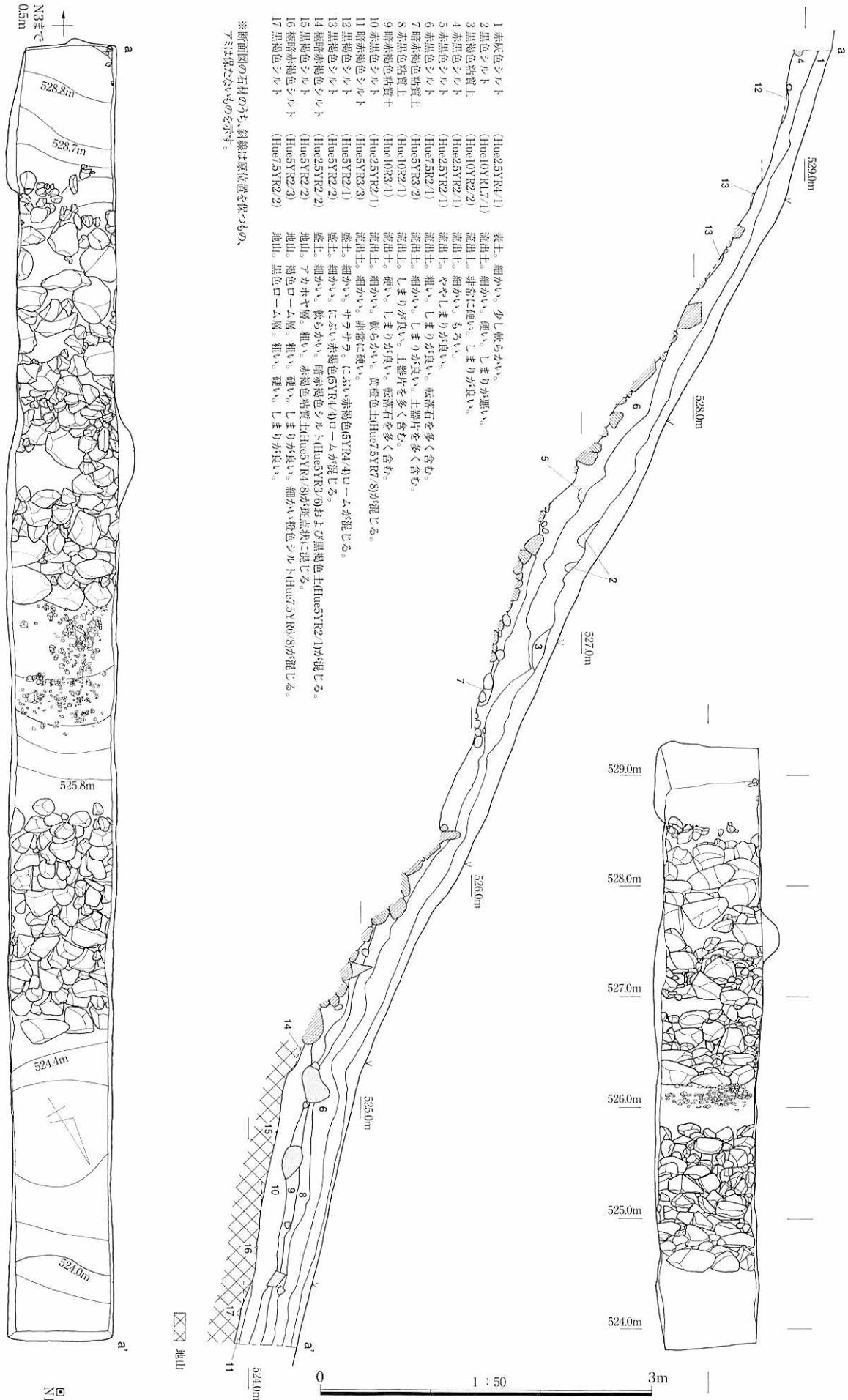
墳端平坦面の範囲だと思われる。その幅は1.9m、傾斜は約12°である。礫は敷かれておらず、周溝となるような掘り込みも確認されていない。墳端平坦面は地山のアカホヤ層(第15層)・ローム層(第16層)によって構成され、その上には盛土(第14層)が施され、基底石が乗る。

段築1段目基底石の南側は墳丘斜面になっており、葺石が良好な状態で525.7mの地点まで遺存する。葺石石材は角が取れて丸みを帯びており、多くが白色を呈している。大きさは15～20cmである。葺石の傾斜は約32°である。

段築2段目基底石は、基準点N3より北に5.8mの位置にあり、その大きさは最大約40cm、下端面の標高は526.2mである。2段目基底石の北側には、1～10cm角の小礫が敷かれた段築テラス面が存在する。標高は526.0～526.2mであり、後述する西1トレンチで検出されたテラス面の標高と比較すると、0.5m前後低くなっている。テラス面と段築1段目葺石上端部の接点付近の石材が遺存していないため、テラス面の正確な幅は確認できないが、復元されるその接点の位置および原位置を留める小礫の様相から幅1.5m程度であると推測できる。傾斜は約11°である。

段築2段目基底石南側の墳丘斜面では、数点の転落がみられるものの葺石同士がほぼ隙間なく組み合せて遺存している。葺石石材は角が取れて丸みを帯びており、西1トレンチの葺石石材と比べると大きいものが使われている。その大きさは15～35cmほどで、下方より上方のほうが大きい傾向がある。葺石の傾斜は約27°である。2段目葺石は、基準点N3より北に約2m、標高528.4mの地点まで遺存している。

段築2段目葺石上端の南側、標高528.7mの地点で傾斜が15°と急激に変化するため、その位置から墳頂平坦面であると判断した。墳頂平坦面の墳丘盛土(第12層および第13層)は褐色ローム



- | | | |
|------------|----------------|---|
| 1 赤褐色シルト | (Hue25YR4/1) | 表土。細かい。少し軟らかい。 |
| 2 黒色シルト | (Hue10YR1.7/1) | 流出土。細かい。硬い。しまりが良い。 |
| 3 黒褐色粘質土 | (Hue10YR2/2) | 流出土。非常に硬い。しまりが良い。 |
| 4 赤褐色シルト | (Hue25YR2/1) | 流出土。ややしまりが良い。 |
| 5 赤褐色シルト | (Hue25YR2/1) | 流出土。粗い。しまりが良い。軽石を多く含む。 |
| 6 赤褐色シルト | (Hue7.5YR2/1) | 流出土。細かい。しまりが良い。土器片を多く含む。 |
| 7 暗赤褐色粘質土 | (Hue6.5YR3/2) | 流出土。粗い。しまりが良い。土器片を多く含む。 |
| 8 赤褐色粘質土 | (Hue10R2/1) | 流出土。硬い。しまりが良い。軽石を多く含む。 |
| 9 暗赤褐色粘質土 | (Hue10R3/1) | 流出土。細かい。軟らかい。黄褐色土(Hue7.5YR7.8)が混じる。 |
| 10 赤褐色シルト | (Hue25YR2/1) | 流出土。細かい。非常に硬い。 |
| 11 黒褐色シルト | (Hue5YR3/3) | 流出土。細かい。非常に硬い。 |
| 12 黒褐色シルト | (Hue5YR2/2) | 盛土。細かい。非常に硬い。赤褐色5YR4/4が混じる。 |
| 13 黒褐色シルト | (Hue5YR2/2) | 盛土。細かい。非常に硬い。赤褐色5YR4/4が混じる。 |
| 14 黒褐色粘質土 | (Hue25YR2/2) | 盛土。細かい。軟らかい。暗赤褐色シルト(Hue5YR3/6)および黒褐色土(Hue5YR2/1)が混じる。 |
| 15 黒褐色シルト | (Hue5YR2/2) | 地山。細かい。軟らかい。赤褐色粘質土(Hue5YR3/8)が混じる。 |
| 16 暗赤褐色シルト | (Hue5YR2/3) | 地山。褐色。粗い。細かい。褐色シルト(Hue7.5YR6.8)が混じる。 |
| 17 黒褐色シルト | (Hue7.5YR2/2) | 地山。黒色。粗い。硬い。しまりが良い。 |

※断面図の石材のうち、斜線は傾位置を保つもの、
アは傾かないものを示す。

第6図 北1トレンチ平面図・断面図・立面図

を含むシルト質の土で構成されている。トレンチの南端で小礫が確認され、また2段目葺石上端部でも比較的小さな礫が確認されたことから、墳頂平坦面には小礫が敷かれていたと推定される。

表土および流出土を11層に分層したが、それらは主にシルト質の土であった。そのなかでも、赤黒色土の第6層と暗赤褐色粘質土の第9層には転落石が多く、暗赤褐色粘質土の第7層と赤黒色粘質土の第8層には壺形埴輪片が多く含まれていた。

遺物は壺形埴輪片および土師器片が出土したが、原位置を留めているものはなかった。(片山)

(2) 西1トレンチ(第7図)

墳丘西側の構造解明を目的として、昨年度の調査区を墳頂方向へ拡張したトレンチである。幅1m、長さ11.3mであり、上端は基準点W3より西へ約2mの位置にある。

今回の報告では段築2段目基底石と段築テラス面に敷かれた小礫の大きさ、墳丘面の傾斜について昨年度の報告(安田編2013)とは異なる数値となっている。これは今回の調査成果を踏まえたうえで再計測したためである。以下、第3・4次調査の成果を合わせて報告する。

段築1段目基底石は基準点W1から東へ2.3mに位置し、大きさは最大約30cm、下端面の標高は525.5mである。基底石付近のみ石材が残存する。基底石西側には地山成形によって墳端平坦面が造られ、褐色ローム層(第28層)のみがみられる。東1・北1トレンチの墳端平坦面で確認されたアカホヤ層が西1トレンチには存在しないことから、墳丘西側ではローム層に達するまで整地が行われたと考えられる。なお、当トレンチでは平坦面全体の把握には至らず、周溝となるような掘り込みも確認されていない。また、確認できた範囲に礫は敷かれていなかった。

段築2段目基底石はW1から東へ約5.7mに位置し、大きさは最大約40cmで、下端面の標高は526.7mに位置する。2段目葺石は良好に残存するものの、W1から東へ約8m以東には全くみられない。石材の多くは丸みを帯びた河原石であるが、角張ったものも一部存在する。赤みがかった色調の石材が若干あるものの、白色の石材がその多くを占めている。大きさは8~30cmであり、東1・北1トレンチよりも小ぶりの石材が目につく。大多数は角閃石安山岩で、わずかに輝石安山岩も混じる。

2段目基底石西側には1~13cm角の小礫が敷かれた段築テラス面が存在する。標高は526.6~526.7mであり、北1トレンチより0.5m前後高く位置する。小礫は幅約0.7mにわたって遺存するが、段築テラス面付近の1段目葺石がまったく残存しないため、その幅を正確に復元することはできない。仮に、北1トレンチと同様の規模だとすると、W1から東へ約4.5~5.7mの範囲に段築テラス面を復元できる。

上記のような段築テラス面であったとすると、1・2段目葺石の傾斜は共に約25°となる。こうした傾斜はW1から東へ11mの地点で約8°と著しく変化することから、ここより墳頂平坦面が広がると判断した。標高は528.8mであり、北1トレンチとほぼ同じ標高である。

トレンチ上部には葺石が残存せず墳丘面の確認が困難であったことから、W1から東へ9m以東では結果的に墳丘を断ち割ったかたちになり、6種類の盛土を確認した。第17層は極暗赤褐色のロームが混じる。第18層と共に墳頂平坦面の盛土として使用される。第18~22層は量の多少はあるが、総じて赤褐色の塊を含む。もろい第20層をしまりの良い第19・21層で挟み、性質の異なる土で盛土成形したことがうかがえる。第22層はトレンチ内の南側でのみ確認され、北側には存在しない。盛土単位の変わり目だと推測される。

遺物は壺形埴輪片と土師器片が出土したが、いずれも原位置を留めていなかった。(富高)

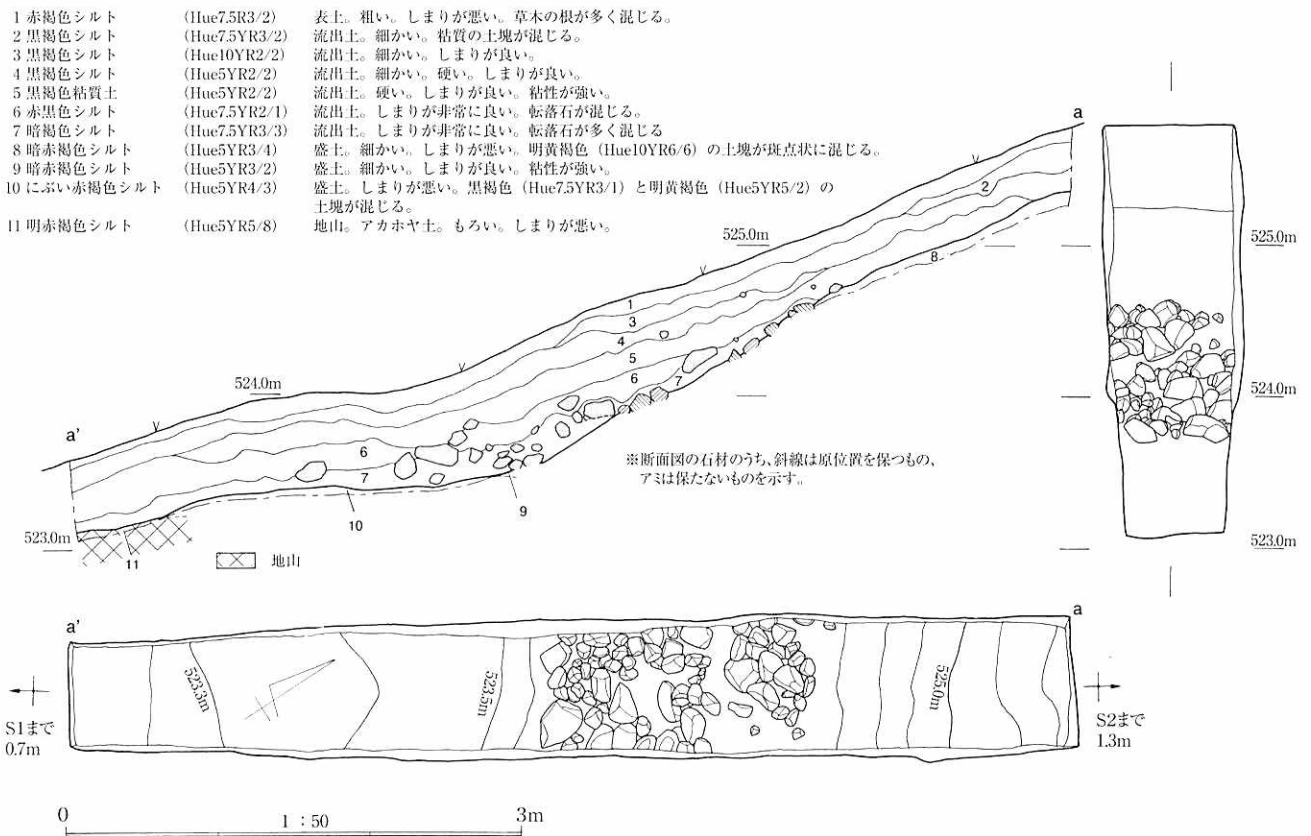
(3) 南1トレンチ (第8図)

墳丘南側の墳端位置の確認を目的として、今回の調査で新たに設定したトレンチである。幅1m、長さ6.5mの規模で設定し、上端は基準点S2から1.5mの位置にある。

調査の結果、地表から0.4～0.8m掘り下げたところで段築1段目の葺石が検出された。段築1段目基底石は基準点S1から北へ4.1m、現地地表下約0.8mの位置にあり、下端面の標高は523.7mである。確認された基底石のうちもっとも大きいものは長さ30cmである。葺石は基準点S1から北へ5.8mの地点まで残存している。葺石石材は丸みを帯びており、河原石を使用していると思われる。白色の石材が多く使用され、大きさは5～20cmを測る。葺石の傾斜は約23°である。

基底石より南側には墳端平坦面の存在を確認することができた。基準点S1より北に1.4m、現地地表下0.55m、標高532.3mの地点で傾斜が変化しているため、そこまでが墳端平坦面の範囲だと思われる。幅は約2m、傾斜は約8°である。墳端平坦面はアカホヤ層に達するまで整地を行った上に、地山のアカホヤとローム土が斑点状に混じる盛土(第10層)を用いて成形している。南1トレンチ以外の北1・東1・西1トレンチでは、盛土を使わずに地山を削り出すことのみによって墳端平坦面を成形している。墳端平坦面の成形方法にこうした違いが生じたのは、古墳築造以前の旧地形の形状が関係していると思われる。

墳端平坦面の盛土(第10層)の上には別の盛土(第9層)があり、基底石はこの上に乗っている。トレンチの北側は葺石の残存状況が悪く、墳丘面を確認することが困難だったため、結果的に墳丘を断ち割ることになってしまった。そこで確認された盛土(第8層)はしまりが悪く、明黄褐色の土塊が斑点状に混じっている。これに対して、第9層はしまりがよく、粘性が強い。第10層はしまりが悪く、



第8図 南1トレンチ平面図・断面図・立面図

黒褐色と明黄褐色の土塊が斑点状に混じる。

表土および流出土は7つの層に分けられ、主にシルト質の土が堆積している。第7層には転落石が多く含まれている。

古墳に伴う遺物は、壺形埴輪や土師器の破片が出土しているが、原位置を保っているものはなかった。また、流出土中から黒曜石製の石鏃未成品が1点出土している。(留野)

4. 墳丘形態の復元 (第9図)

平原6号墳は後世の削平をほとんど受けずに、ほぼ築造当時の状態を保っている古墳である。昨年度の第3次調査と今年度の第4次調査では、墳丘の東西南北4方向にトレンチを設定し、いずれにおいても段築1段目の葺石が確認された。また、墳端平坦面は東1・北1・南1トレンチで全体が、西1トレンチではその一部が検出されている。北1・西1トレンチでは、段築2段目の葺石と段築テラス面、および墳頂平坦面も確認されている。ここでは、これまでの調査で得られた成果を元に墳丘形態の復元を行う。

段築 墳端平坦面の全体は、西1トレンチ以外の3つのトレンチで確認された。東1・南1トレンチで標高523.3m、北1トレンチで524.0mの位置に傾斜変換点があり、そこまでが墳端平坦面の範囲であると思われる。墳端平坦面は、段築1段目基底石から傾斜変換点までの1.9～2mの幅で、墳丘の外側をめぐるようにと推測される。

段築1段目の葺石は全てのトレンチで検出されている。残存している石材は墳丘上に隙間なく敷き詰められているが、狭い調査範囲のため目地の通るような様子は確認されていない。基底石には長さ20～40cmの比較的大きな石材を用いている。段築1段目基底石下端面の標高は、東1・南1トレンチで523.7m、北1トレンチで524.5m、西1トレンチで525.5mである。墳丘の西側と東側・南側とでは墳端の標高に1.8mの差があり、墳端は同じレベルでめぐってはいない。

段築テラス面は、北1・西1トレンチで確認されている。段築テラス面には小礫が敷かれていた。北1トレンチの段築テラス面で確認された小礫の残存状況および復元される段築1段目葺石と段築テラス面の接点位置から、幅は1.5m程度であると推測される。

段築2段目の葺石は、北1・西1トレンチで確認されている。隙間なく敷き詰められた石材の特徴は、段築1段目の葺石と共通している。北1トレンチでは上部にある石材ほど大きい傾向がみられた。狭い調査範囲のため、段築1段目の葺石と同様に目地の通る様子は確認できなかった。2段目基底石下端面の標高は、北1トレンチで526.2m、西1トレンチで526.7mである。北1トレンチと西1トレンチとで比較すると、墳端では標高差が1.0mあったのに対して、2段目の基底石下端の標高差は0.5mと小さくなっている。段築テラス面と段築2段目の基底石の位置、現在の地形から段築2段目は楕円形を呈する可能性がある。

北1トレンチでは標高528.7m、西1トレンチでは528.8mの位置から墳頂平坦面がはじまると推測される。北1・西1トレンチで確認されたこの標高から、墳頂平坦面は標高差を無くすようにつくられたと思われる。北1トレンチの上端部分で小礫が確認されたことから、墳頂平坦面には小礫が敷かれていたと思われる。

墳丘構築技法 墳端の成形技法には、東1・北1・西1トレンチと南1トレンチの間で違いがみられた。東1・北1・西1トレンチでは地山を削りだして古墳の土台とする地山成形が採用されている。東1・北1トレンチではアカホヤ層、西1トレンチではローム層まで整地を行っている。一方、南1

トレンチではアカホヤ層に達するまで整地を行い、その上に盛土を行って土台としている。墳端平坦面の成形方法にこうした違いが生じたのは、古墳築造以前の旧地形の形状が関係していると思われる。第9図を見ると、尾根の北側では等高線がほぼ直線的に伸びているのに対し、南側では525～526mあたりの等高線がやや南方に張り出している。これは墳丘構築に際して、その南側により多くの盛土がなされていることの反映であると推測される。すなわち、古墳築造以前の尾根筋の南北幅が設計上の墳丘規模よりも小さかったため、予定通りの墳丘の大きさを確保するために墳丘築造においてその南側により多くの盛土が施されたのだと思われる。

すべてのトレンチの段築1段目基底石は、薄い盛土の上に乗っている。墳丘内部の盛土は西1・南1トレンチでその一部が確認された。西1トレンチでは性質の異なる盛土が交互に積み重ねられている様子がみられた。墳端平坦面の一部や墳丘の盛土には、墳丘の土台を整地した際に掘り出された地山の黒ボク土、アカホヤ、ローム土を混合した土が用いられている。

葺石石材 葺石に使用される石材は、大部分が角閃石安山岩で、一部に輝石安山岩がみられる。ごく一部に流紋岩や溶結凝灰岩も認められる。これらの石材は、墳丘北側の谷部にある沢で入手することができる。そのため、古墳築造に際して遠隔地から特別に持ち込まれたものではないと考えられる。石材には白色のものが多く使用されており、選択的に白色石材を利用していった可能性が高い。

墳形と規模 現状の地形測量図と第3・4次調査の成果から、平原6号墳は2段築成の円墳で、その規模は東西約31m、南北約30mと推定される。直径の復元にあたっては、各トレンチの段築1段目基底石の位置を根拠としている。また、墳端平坦面を含めた直径は、北1・南1トレンチの傾斜変換点の位置から南北で34m程度と推定される。

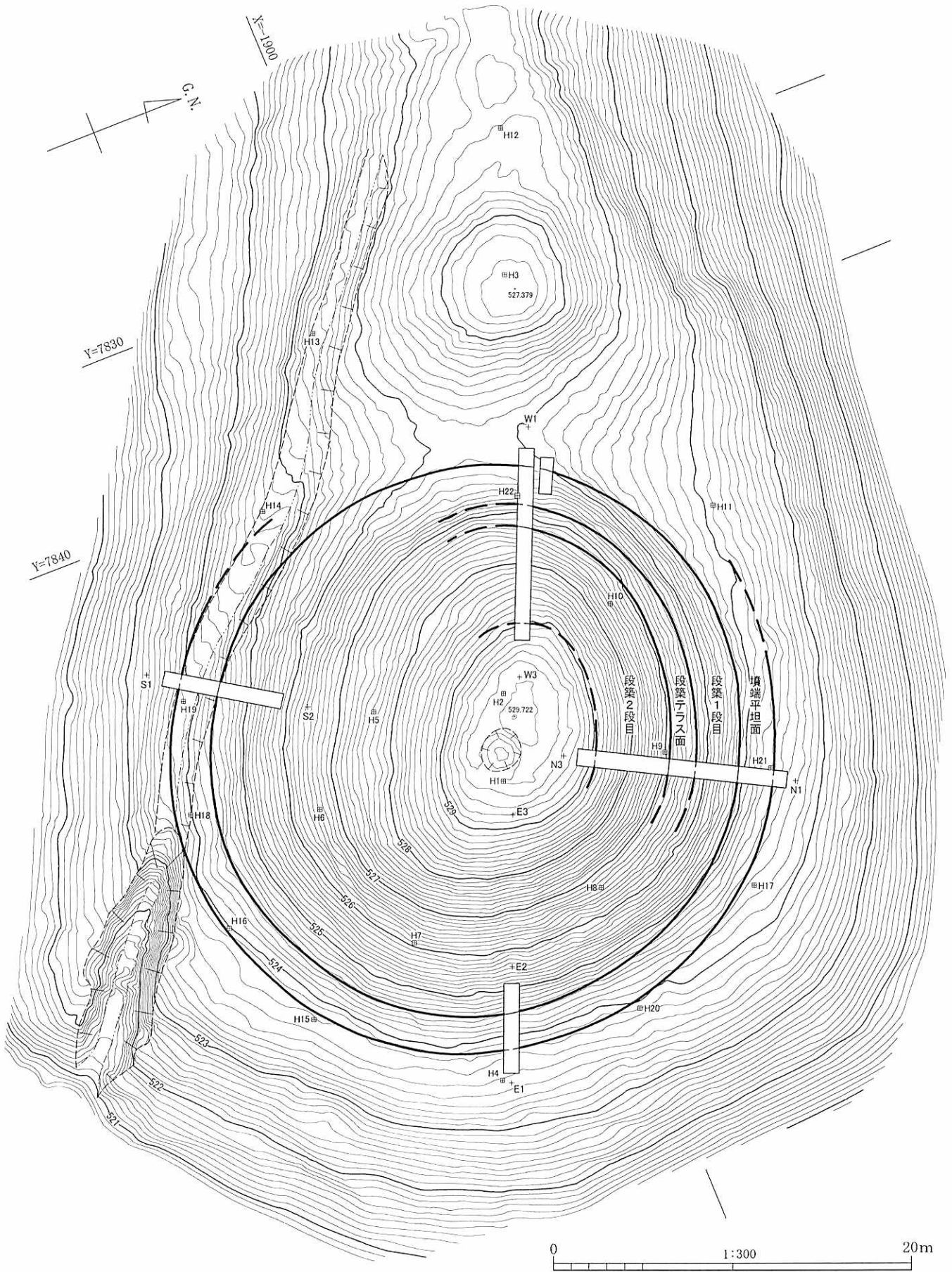
平原6号墳は丘陵の尾根筋状に立地しているが、墳形は正円に近い形となっている。墳丘の築造では地形による制限を考慮して、設計上の墳形に近づけるための工夫がみられる。それは墳端の成形技法からうかがうことができる。

小結 以上の結果を箇条書きにすると、平原6号墳では以下のような特徴をあげることができる。

- ・東西約31m、南北約30mの円墳で、墳丘は2段築成である。
- ・段築1段目および2段目の斜面には葺石が施され、段築テラス面には小礫が敷かれる。
- ・墳端には平坦面を有す。しかし、ここには礫は敷かれない。周溝は存在しない。
- ・墳頂平坦面には小礫が敷かれている可能性がある。
- ・墳丘の土台の成形は地山の削り出しを主体とする。ただし、墳丘の南側では地山を削り出した上に、盛土を行って土台としている。 (留野)

第4表 平原6号墳墳丘各部位の計測値

		東1トレンチ	北1トレンチ	西1トレンチ	南1トレンチ
段築2段目	墳頂平坦面との境界(推定)の標高	—	528.7m	528.8m	—
	基底石下端面の標高	—	526.2m	526.7m	—
段築テラス面	幅	—	1.5m程度	—	—
段築1段目	残存葺石上端の標高	—	525.7m	—	—
	基底石下端面の標高	523.7m	524.5m	525.5m	523.7m
墳端平坦面	幅	2m	1.9m	—	2m
	外郭線の標高	523.3m	524.0m	—	523.3m



第9図 平原6号墳墳丘形態復元図

四 出土遺物

1. 古墳に伴う遺物

(1) 壺形埴輪 (第3・4次調査出土) (第10・11図、第5表)

今年度の調査において、壺形埴輪片は292点(北1トレンチ145点、西1トレンチ56点、南1トレンチ91点)出土しており、昨年度出土の346点を含めると、計638点を数える。今年度も昨年度と同様に全て破片であり、全体を復元できる個体はなかった。また、どのトレンチにおいても原位置を保つ個体は確認できなかった。以下、今年度出土の壺形埴輪に加え、昨年度出土のものについても合わせて記述するが、形態や調整など共通する点が多いため説明はある程度まとめて行うこととする。

単口縁 (1～5) 1～5は単口縁壺形埴輪であり、口縁部から底部までが接合できる個体は確認されていない。口縁部は外傾しながら直線的に開くタイプ(1～4)とラップ状に大きく開くタイプ(5)に分けられ、いずれも端部に面をもつ。胴部はあまり張らず、5から長胴と推測される。外面調整は口縁部から胴部にかけてタテハケ・ナナメハケが行われ、口縁端部、頸部付近には丁寧なヨコナデが施される。また、肩部に装飾的なヨコハケが施される個体(3)もみられる。内面調整は口縁部にはヨコハケ・ナナメハケの後、ヨコナデが施される。頸部は集中的にユビオサエが施された後にナデが行われ、胴部はケズリにより薄く調整される。5をはじめとして黒斑をもつ個体が多数見受けられることから、当古墳の壺形埴輪は野焼きによる焼成と推測される。図化した個体に明確な赤色顔料の塗布は確認できなかったものの、赤みがかった破片が存在しているため、赤色顔料が薄く塗布されていた可能性がある。

今年度出土し、図化した個体は2である。口縁部は外湾気味に開きつつも直線的に伸びる。器壁は薄く、胎土も精製されおり、丁寧な作りである。外面調整はタテハケの後、丁寧なヨコナデが行われる。内面調整はヨコハケ・ナナメハケの後、ヨコナデが施される。口縁端部は丁寧にナデが施される。赤色顔料の塗布や黒斑は確認できなかった。復元した口径は17.4cmである。

二重口縁 (6～10) 6～10は二重口縁壺形埴輪であり、単口縁のものと同様に全形をうかがうことのできる個体は確認されていない。直立した頸部を持つものは存在せず、いずれも外傾した頸部が第一口縁へと続く。頸部は、第一口縁付近で外反するタイプ(6・9・10)と直線的に開くタイプ(7・8)とがみられる。第一口縁と第二口縁は作り分けがなされ、その境は比較的明瞭に段をなしている。昨年度の調査(第3次調査)では、第二口縁部全体が残存する個体が出土せず、わずかな残存部より第二口縁はあまり長く続かないものと判断していた。しかし今年度の調査において第二口縁部上端まで遺存する個体(7)が出土したことで、器壁の薄い第二口縁が外湾しながら約3.5cm続くことが判明した。胴部形態は単口縁のものを考慮すると、長胴と考えられる。内外面調整は基本的に単口縁形態のものとは変わらず、第二口縁部は内外面ともにヨコナデのみ施される。

今年度出土し、図化したものは7および10である。

7は第二口縁部上端から頸部にかけて残存する個体である。頸部は外傾しており直線的に伸びる。第一口縁と第二口縁の境は比較的明瞭である。第一口縁と第二口縁の接合が剥がれた状態で出土したことから、第一口縁を成形した後に、その上面端部に第二口縁を載せたものだと分かる。外面は、有段部から頸部にかけてタテハケの後にヨコナデが行われ、第二口縁部はヨコナデのみ施される。口縁端部は丁寧にヨコナデが行われる。内面は、有段部から頸部にかけてヨコハケの後にヨコナデが施さ

れ、第二口縁部はヨコナデのみの調整である。赤色顔料や黒斑は確認できない。復元した第二口縁部径は 18.2 cm、有段部径は 14.8 cm である。

10 は、北 1 トレンチ段築 2 段目基底石付近よりまとまって出土し、色調や胎土も似ていることから同一個体と考えて復元した。器形は単口縁形態のものを考慮し、長胴としている。

10 のうち口縁部は、有段部から頸部にかけて残存している。器壁が他の個体より厚く、最大 1.2 cm を測る。頸部は第一口縁付近で外反し、そこへ第二口縁を載せている。第一口縁と第二口縁の境は比較的明瞭に段をなす。第二口縁は残存していないが、7 から推測すると器壁の薄い第二口縁が 3 ~ 4 cm 程度続くものとみられる。外面は頸部に強いタテハケ・ナナメハケが施された後、有段部周辺に丁寧なヨコナデが行われる。内面は頸部にヨコハケが施された後、ヨコナデにより調整される。赤色顔料・黒斑は確認できない。復元した有段部径は 20.2 cm、頸部径は 13.0 cm である。

これに続く胴部であるが、摩耗により明確に接合することはできない。肩はあまり張らず、胴部最大径を示す部分までは残存していない。外面には全体にタテハケ・ナナメハケの後、頸部付近にヨコナデが行われている。内面には頸部と胴部の境にユビオサエが施された後、ユビナデが行われる。胴部には反時計回りのケズリが行われている。赤色顔料の塗布・黒斑は確認できない。

この個体の底部付近は胴部に比べて器壁が薄い。外面は全体にタテハケ・ナナメハケが施された後、底部付近にヨコナデが行われる。内面は横方向で反時計回りのケズリや左上がりのケズリが施される。以下で述べる底部(13 ~ 16)のような、底部のツマミ整形あるいはケズリ整形の痕跡は確認できなかった。赤色顔料・黒斑もみられない。

胴部 (11・12) 2 個体を図化しているが、単口縁・二重口縁のどちらに対応するかは不明である。胴部は、11 のようにあまり肩の張らないタイプ (5・11) と 12 のようにやや肩の張るとタイプ (3・4・8・12) とが存在する。11 は資料増加に伴い再検討した結果、胴部最大径を示す部分まで残存していないことが判明したため、昨年度の図に修正を加え報告している。

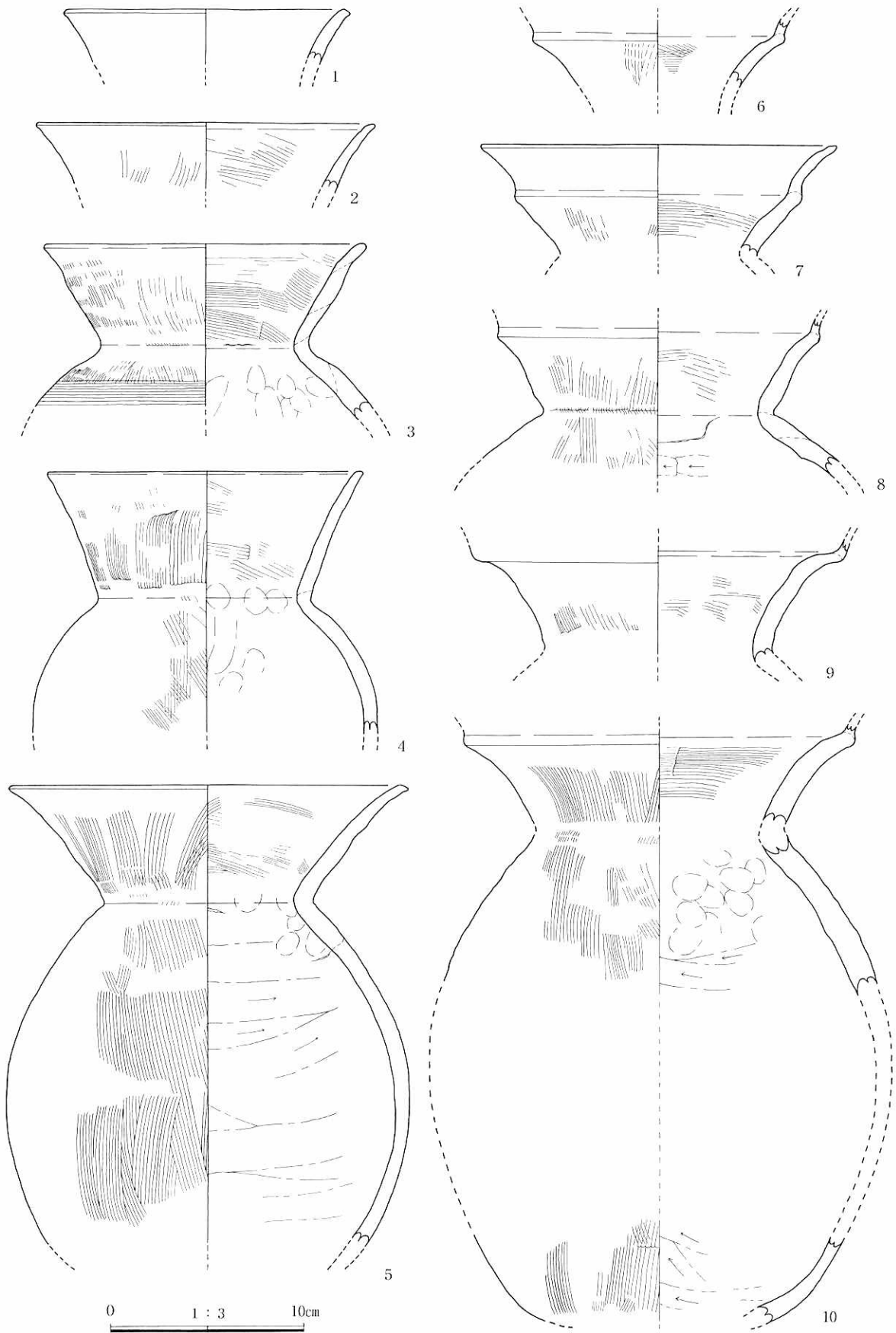
底部 (13 ~ 16) 4 個体を図化しているが、単口縁・二重口縁のどちらに対応するものかは確認できない。底部はすべて粘土紐積み上げにより成形され、当初より底面を有していない。底部には指でつまんで整形されるタイプ (13 ~ 15) とケズリにより整形されるタイプ (16) とがあり、いずれも底部を薄く仕上げようという意識のもとに行われている。

(2) 土師器 (第 3・4 次調査出土)

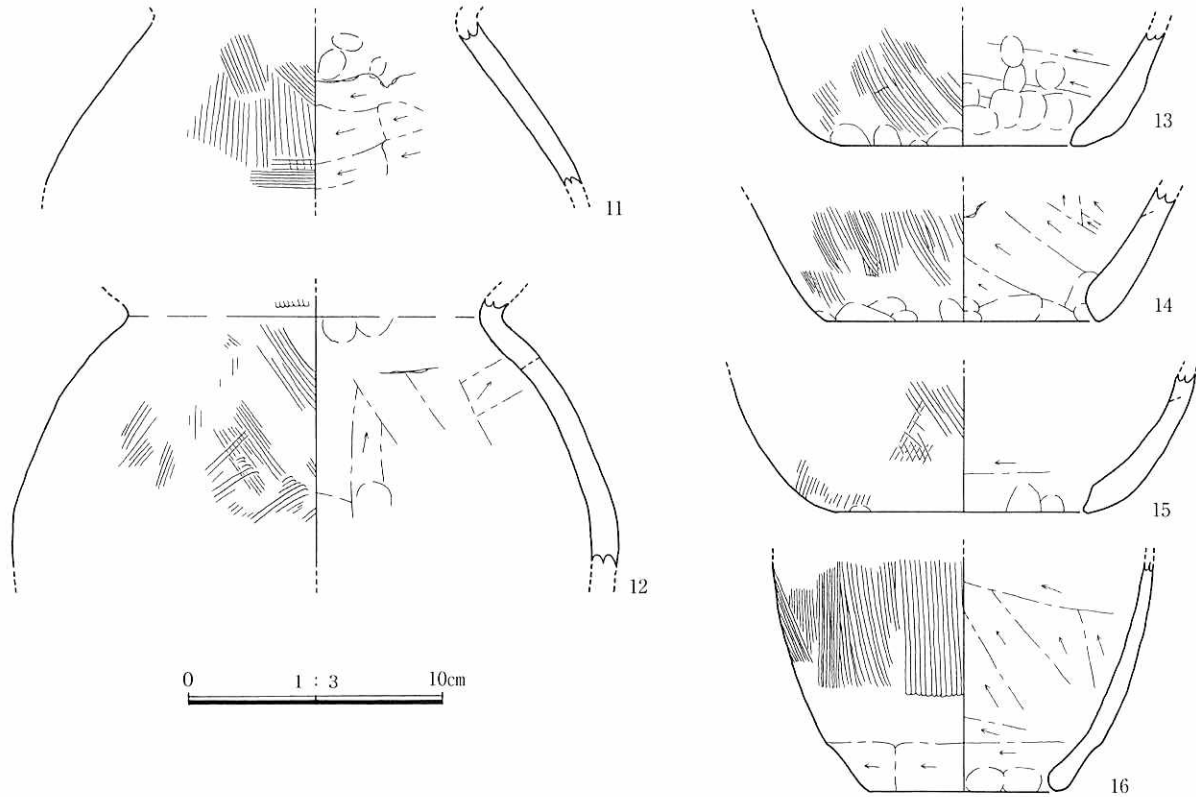
今年度の調査において、土師器は 15 点 (北 1 トレンチ 3 点、西 1 トレンチ 7 点、南 1 トレンチ 5 点) 出土した。しかしいずれも小破片であったため、図化には至らなかった。昨年度は高坏の脚裾端部 2 個体、甕の胴部 1 個体が確認されている。高坏は、脚柱部と脚裾部の間に明瞭な屈曲部を有するタイプ (高坏 A) である。また、甕は胴部の幅広なハケメより林田編年 2 期に位置づけられる (林田 2002)。高坏と甕の編年を考慮すると土師器の時期は、林田編年 1 期から 2 期に位置づけられ、これは前方後円墳集成編年 (広瀬 1991) (以下集成編年とする) 6 期前後に対応する。

(3) 壺形埴輪・土師器の評価

昨年度の報告において当古墳の壺形埴輪は、長胴である点や底部が焼成前成形である点などを踏まえて、集成編年 4 期と位置づけられている。一方、土師器は集成編年 6 期前後に位置づけられ、壺形埴輪の年代観と大幅な差違が生じることとなった。今年度の調査ではこうした問題の解決が望まれたが、土師器の良好な資料に恵まれず再検討はかなわなかった。そこで今回は、第 1 章第 2 節で集成を行なった九州の壺形埴輪と当古墳のものとを比較し、時期について再度検討を行うこととする。なお、



第 10 图 平原 6 号墳出土壺形埴輪実測図 (1)



第 11 図 平原 6 号墳出土土壺形埴輪実測図 (2)

第 5 表 平原 6 号墳出土土壺形埴輪一覧表

No.	器種	残存部位	法量 (cm)			調整	色調	焼成	備考	出土地点	第48集 掲載No.
			口径	底径	器高						
1	壺形埴輪	口縁部	(14.6)	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	単口縁。	西1 トレンチ	4
2	壺形埴輪	口縁部	(17.4)	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ・ナナメハケ 内：ヨコナデ・ナナメハケ	外：にぶい黄褐色 内：橙	良好	単口縁。	南1 トレンチ	2013年 出土
3	壺形埴輪	口縁部 ～ 肩部	16.5	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ・ヨコハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ・ナナメハケ・ユビオサエ・ユビナデ	外：明黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	肩部に明瞭なヨコハケが一周めぐる。単口縁。	西1 トレンチ	2
4	壺形埴輪	口縁部 ～ 肩部	16.1	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ・ヨコハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ・ナナメハケ・ユビオサエ・ユビナデ	外：明黄褐色 内：黄褐色	良好	復元した胴部最大径は17.4cm。単口縁。	北1 トレンチ	3
5	壺形埴輪	口縁部 ～ 胴部	(20.4)	—	(28.0)	外：ヨコナデ・タテハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ・ナナメハケ・ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙	良好 黒斑あり	胴部は長胴と思われる。復元した胴部最大径は20.6cm。単口縁。	北1 トレンチ	1
6	壺形埴輪	有段部～ 第一口縁部	—	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ・ナナメハケ	外：黄褐色 内：淡黄	良好	復元した有段部径は12.9cm。二重口縁。	東1 トレンチ	5
7	壺形埴輪	第二口縁部 ～ 頸部	(18.2)	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元した第二口縁部径は18.2cm。有段部径は14.8cmである。二重口縁。	西1 トレンチ	2013年 出土
8	壺形埴輪	有段部～ 胴部	—	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ 内：ヨコハケ・ナナメハケ・ナデ・ヨコナデ・ケズリ	外：浅黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元した有段部径は16.6cm、頸部径は12.0cm。二重口縁。	西1 トレンチ	6
9	壺形埴輪	有段部～ 第一口縁部	—	—	—	外：ヨコナデ・ナナメハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ	外：橙 内：にぶい橙	良好	復元した有段部径は19.4cm。二重口縁。	東1 トレンチ	7
10	壺形埴輪	有段部～ 第一口縁部	—	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ・ナナメハケ 内：ヨコナデ・ヨコハケ	外：橙 内：にぶい褐色	良好	復元した有段部径は20.2cm。二重口縁。	北1 トレンチ	2013年 出土
	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ・ナナメハケ 内：ナデ・ケズリ・ユビオサエ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	復元した頸部径は13.0cm。二重口縁。	北1 トレンチ	2013年 出土
	壺形埴輪	胴部～ 底部付近	—	—	—	外：ヨコナデ・タテハケ・ナナメハケ 内：ケズリ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好	二重口縁。	北1 トレンチ	2013年 出土
11	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：ヨコナデ・ナナメハケ・タテハケ・ヨコハケ 内：ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい橙 内：黄褐色	良好 黒斑あり	明瞭なヨコハケを肩部にもつ。復元した頸部径は12.6cm、胴部最大径は23.8cm。	東1 トレンチ	8
12	壺形埴輪	胴部	—	—	—	外：タテハケ・ヨコナデ・ナナメハケ 内：ユビオサエ・ケズリ	外：にぶい橙 内：浅黄褐色	良好	復元した頸部径は14.6cm、胴部最大径は23.0cm。	北1 トレンチ	9
13	壺形埴輪	底部	—	(9.4)	—	外：ナナメハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：明黄褐色 内：黄褐色	良好 黒斑あり	最終段階において底部をつまんで整形。	西1 トレンチ	10
14	壺形埴輪	底部	—	(10.8)	—	外：ナナメハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	良好 黒斑あり	最終段階において底部をつまんで整形。	西1 トレンチ	12
15	壺形埴輪	底部	—	(9.7)	—	外：ナナメハケ・ユビオサエ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：にぶい橙 内：浅黄褐色	良好 黒斑あり	最終段階において底部をつまんで整形。	西1 トレンチ	11
16	壺形埴輪	底部	—	(7.4)	—	外：タテハケ・ケズリ・ユビナデ 内：ケズリ・ユビオサエ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	良好 黒斑あり	最終段階において底部をけずって整形。	北1 トレンチ	13

※ () は復元径。黒斑は残存部に確認できるもののみ記述。

検討対象とする壺形埴輪は、阿蘇地域との関わりが考えられる地域のものに限定する。

まず、平原6号墳の周辺に目を向けると、阿蘇市長目塚古墳において壺形埴輪が出土している。長目塚古墳は集成編年6～7期頃の前方後円墳であり、単口縁・二重口縁の壺形埴輪に加えて円筒埴輪も出土している。壺形埴輪の胴部形態は長胴で、底部は粘土紐積み上げによる焼成前成形である。底部は完全に肥厚化していることから平原6号墳の壺形埴輪より後出するものといえる。

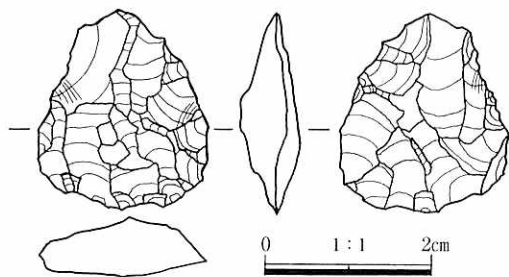
西方へと視野を広げると、熊本県菊池川流域に壺形埴輪の出土した古墳が点在している。玉名市天水小塚古墳は集成編年5期の円墳であり、単口縁・二重口縁の壺形埴輪が出土している。胴部形態は長胴、底部は焼成前成形であり、前述した長目塚古墳出土のものと形態的に類似する。器壁は厚く、器高も47.5cmもあることから大型化の最終段階と考えられる。一方、平原6号墳の壺形埴輪は30cm程度と小型であり、天水小塚古墳のものより古相と思われる。

次に大分県大野川流域の古墳と比較してみたい。大野川の支流である三重川が流れる豊後大野市には、壺形埴輪をもつ古墳が多数分布する。豊後大野市立野古墳は集成編年4期の前方後円墳で、単口縁・二重口縁の壺形埴輪が出土している。また、阿蘇周辺域において円筒埴輪が共伴する最初期の古墳であり、円筒埴輪の製作技法が壺形埴輪の底部成形にも取り入れられている。一方、平原6号墳は円筒埴輪を樹立せず、その技術のみ採用している点から立野古墳よりも後出するものと考えられる。同市重政古墳は、集成編年4期に位置づけられる前方後円墳で、壺形埴輪が出土している。底部を厚い平底に成形した後、穿孔を施す特徴的なもので、大分県中津市の勘助野地1号墳のものが類例に挙げられる。底部の肥厚化が完成している点から、平原6号墳の壺形埴輪より新相のものといえる。

以上を踏まえると、阿蘇およびその周辺域においては集成編年4期より壺形埴輪がみられる。集成編年4期の壺形埴輪はいずれも長胴であり、底部が焼成前成形され底面を有さないものが多数を占める。集成編年5期になると4期の特徴はそのままに、大型化の最終段階を迎える。平原6号墳の壺形埴輪を見てみると、胴部形態は長胴で、底部は焼成前成形であることから集成編年4期以降の特徴を備えている。また底部が肥厚化しておらず、器高も集成編年5期のものと比べると小型であるなど、5期よりも古相の特徴も見受けられる。これらの特徴を踏まえると当古墳の壺形埴輪は、昨年行った評価と同様に集成編年4期と位置づけるのが妥当である。しかし今回の集成より、壺形埴輪は古墳ごとに独自の様相を呈することが判明している。そのため従来の編年に対応させることが難しい例も多く、細かな時期判断の材料として用いることが困難である。今後は、こうした壺形埴輪編年についての再検討に加え、土師器など他の遺物にも時期を求める必要がある。(山元)

2. 古墳に伴わない遺物 (第4次調査出土) (第12・13図)

石器 古墳に伴わない遺物として、石鏃の未成品が1点出土している。長さ26mm、幅22mm、縁辺



第12図 石器実測図



第13図 石器写真

からの粗雑な押圧剥離で整形されており、自然面は残されていない。細かな調整は施されておらず、先端も鋭利ではないことから、未成品であると判断した。石材は佐賀県腰岳産の黒曜石である。時期は縄文時代から弥生時代のいずれかに属すると考えられる。(留野)

五 まとめ

平原古墳群の現状 平原古墳群は熊本県阿蘇市山田字平原に所在する。そこは阿蘇谷北縁の遠見ヶ鼻と象ヶ鼻のほぼ中央にあたり、長目塚古墳を擁する中通古墳群からは北西に視認できる低い尾根筋上である。平原古墳群は1981年にその存在が確認され、1号墳の発掘調査および2～4号墳の測量調査が実施された。調査後1号墳は破壊され消滅したが、それ以外の古墳は良好に旧状を保っている。しかし、現在に至るまでのあいだに古墳号数に若干の混乱が生じており、今回発掘調査対象とした6号墳は、かつて4号墳として測量されたものである。また、古墳総数も未確定である。現在までに、破壊された1号墳を含めて、2つの尾根筋上に計9基の円墳が分布することが確認されている。

6号墳の墳丘 熊本大学文学部考古学研究室では2011年度に平原古墳群の調査を開始し、2012・2013年度には6号墳の発掘調査を行った。6号墳の発掘調査では、墳丘の東・北・西・南の4箇所にトレンチを設け、墳丘規模・構造の解明に努めた。その結果、6号墳は葺石を有する2段築成の円墳で、直径が東西約31m、南北約30m、高さが墳丘北側で約4.5m、西側で約3.5mであることが明らかとなった。墳端には幅約2mの平坦面がめぐるが、礫は敷かれてない。平坦面の形成は、墳丘の東・北・西側では地山の削り出しのみによって、一方南側では地山削り出しののち盛土を行うことによってなされている。墳端平坦面の形成方法にこうした差違が生じたのは、尾根筋の南北幅が古墳設計上の墳丘規模よりも小さかったため、尾根筋南側に重点的に盛土を行うことによって設計通りの規模を確保しようとしたからだと思われる。また、墳端は水平にそろえられておらず、尾根筋上位の西側と下位の東側では約1.8m、西側と北側でも約1mのレベル差がある。なお、周溝は存在しない。

段築1段目葺石はすべてのトレンチで、段築2段目葺石と段築テラス面、墳頂平坦面は北・西2箇所のトレンチで検出した。段築テラス面には小礫が敷かれ、その復元される幅はおよそ1.5m程度である。段築テラス面の標高は墳丘北側が西側より約0.5m低いのみであり、墳端平坦面に比べてそのレベル差はかなり解消されている。墳頂平坦面は墳丘北側と西側でその一部を確認したにすぎないため不明なところが多いが、ほぼ水平面をなすと考えられる。また一部に小礫がみられたことから、礫敷きであった可能性がある。葺石は墳丘の北・東側でとくにその遺存状態が良好である。1・2段目の葺石とも基底石には20～40cm程の比較的大きな石材が用いられ、斜面部にはこれよりも小さな石材が強固にかみ合うようにして配される。調査範囲内では目地が通るような様子はみられない。なお、葺石石材の多くは白色を呈する角閃石安山岩で、6号墳北側の沢で採取が可能である。

6号墳の出土遺物と時期 昨年度と同様、墳丘流出土中から壺形埴輪と土師器の破片が出土した。原位置を保つものはない。壺形埴輪には単口縁と二重口縁があり、その割合は同程度である。今年度、第二口縁全体が遺存する二重口縁が検出され、昨年度は不明であった第二口縁部の長さがおよそ3.5cmであることが明らかとなった。しかし依然として、単口縁、二重口縁とも全形復元可能な個体は出土していない。土師器については、今年度調査では図化可能な個体は出土せず、昨年度報告した高坏・甕に関する情報以上に付け加えることはない。これらを従来の編年観に対応させると、壺形埴輪は集成編年4期、土師器は6期前後となり、両者の時期的位置付けに不整合が生じている。

このように古墳築造時期が特定できない点をはじめ、墳丘形態に関しても段築2段目や墳頂平坦面の様相など、まだまだ不明な点が多い。とくに古墳築造時期の解明のためには、埋葬施設についての情報を得ることも必要であろう。次年度以降の調査に期したい。(杉井 健・甲斐 郁)

引用・参考文献

- 阿蘇品保夫 1999『阿蘇社と大宮司 中世の阿蘇』一ノ宮町史 自然と文化 阿蘇選書2 一の宮町
阿蘇町教育委員会 1989『小倉林道石発掘資料』
阿蘇町町史編さん委員会 2004『阿蘇町史』第1巻 通史編 阿蘇町
岩崎充宏・山下志保編 1994「中通古墳群」『熊本大学考古学研究室研究報告』第1集 熊本大学考古学研究室：
pp. 1-47
岩崎政教他 1995『土地分類基本調査 阿蘇山・竹田』熊本県企画開発部土地対策課
緒方 徹編 2000『阿蘇町遺跡地図－阿蘇町遺跡詳細分布調査－』阿蘇町教育委員会
緒方 徹編 2011「附論 平原B遺跡－平原B遺跡内発見の火葬墓緊急調査－」『宮山遺跡』Ⅱ 阿蘇市文化財調査
報告第2集 阿蘇市教育委員会：pp. 173-193
緒方 徹・宮本利邦編 2011『宮山遺跡』Ⅱ 阿蘇市文化財調査報告第2集 阿蘇市教育委員会
小口妙子 1985「二重口縁壺の検討」『三国の鼻遺跡』Ⅰ 小郡市文化財調査報告書第25集 小郡市教育委員会：
pp. 119-122
小畑弘己 2007「阿蘇旧石器文化の特質」『阿蘇における旧石器文化の研究』熊本大学文学部考古学研究室研究報告
第2集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 281-293
片岡宏二 1985「まとめ」『三国の鼻遺跡』Ⅰ 小郡市文化財調査報告書第25集 小郡市教育委員会：pp. 132-157
川西 博 1994『大分県の気象探訪：自然を育む大気と水の営み』大分県合同新聞文化センター
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会：pp. 1-70
隈 昭志 1999『長目塚と阿蘇国造』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書1 一の宮町
島津義昭 1982「阿蘇の古墳」『えとのす』第19号 新日本教育図書：pp. 85-96
島津義昭 1983「阿蘇の先史時代」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 84-95
杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜の変遷の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』
九州前方後円墳研究会：pp. 131-184
千田 昇他 1995『土地分類基本調査 宮原・阿蘇山・八方ヶ岳』大分県農政部農村整備課
高橋 徹 1992「九州」『古墳時代の研究』9 古墳Ⅲ 埴輪 雄山閣出版：pp. 81-89
竹中克繁 2004「九州壺形埴輪研究序論－壺形埴輪の変遷と意義－」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会：
pp. 13-32
田中裕介 1995「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と画期（上）－埴輪と埴丘形態からみた大分の首長墳の
編年－」『おおいた考古』第7集 大分県考古学会：pp. 41-77
野田拓治 1983「阿蘇の古墳文化」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 38-49
白水村史編纂委員会 2007『白水村史』白水村
林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中期・後期の土師器－その編年と地域性－』九州前方後
円墳研究会：pp. 117-144
広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社：pp. 23-26
文化財研究会 1983「阿蘇町小倉古墳群第一次測量調査概要報告」『熊本短期大学連合学会会報 研究論集』第38
号 熊本短期大学連合学会：pp. 81-91
文化財研究会 1984「実験考古学の私的見解と小倉古墳群第二次測量調査概要報告」『熊本短期大学連合学会会報
研究論集』第39号 熊本短期大学連合学会：pp. 63-75
松本幡郎 1983「阿蘇の成り立ち」『えとのす』第22号 新日本教育図書：pp. 84-90
宮崎敬士編 2010『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告書第257集 熊本県教育委員会
宮本利邦編 2012『下の原遺跡』阿蘇市文化財調査報告第3集 阿蘇市教育委員会
村上久和 1988「壺形埴輪の変遷」『勘助野地遺跡』一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
大分県教育委員会：pp. 115-118
安田未来編 2013「平原古墳群調査報告1」『考古学研究室報告』第48集 熊本大学文学部考古学研究室
渡辺一徳 2001『阿蘇火山の生い立ち』一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書7 一の宮町

挿図出典

第1図 安田編 2013